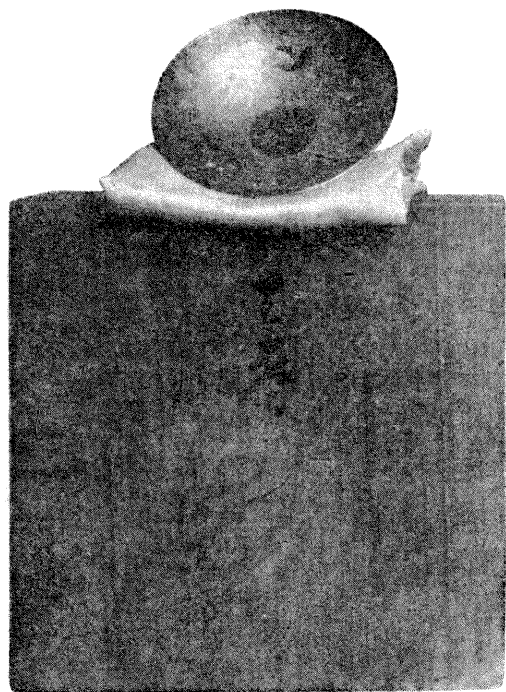


なまはのつゆ



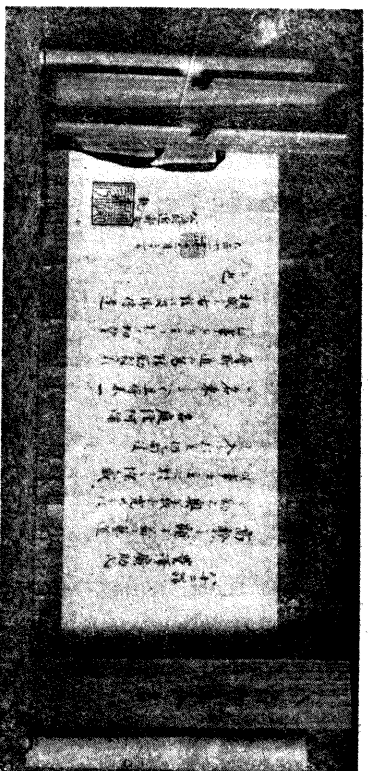
恭しく此之小冊子を

亡き父之靈前に捧げまつる



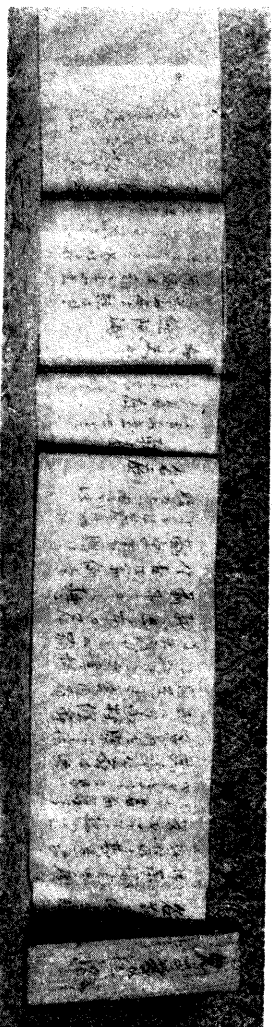
御下賜之天盃

近衛公時御直命書



源氏丸茂山杉

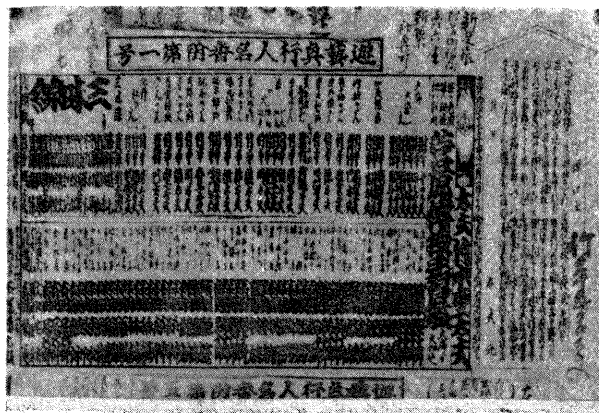
書義意之義名爾阿結庵名



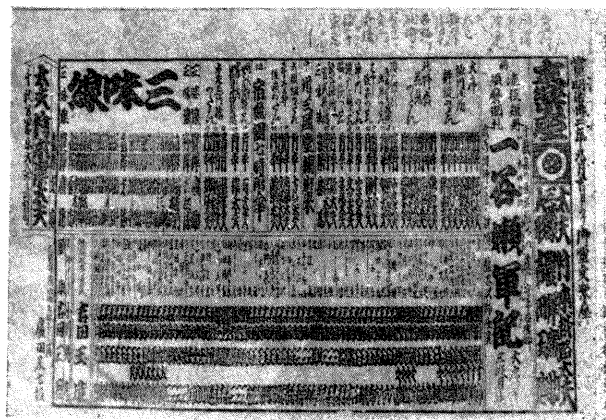


るたけ蕭を裳装之名改

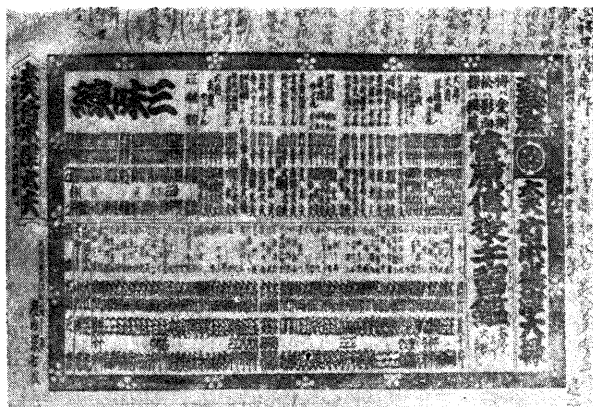
彌阿絃庭名



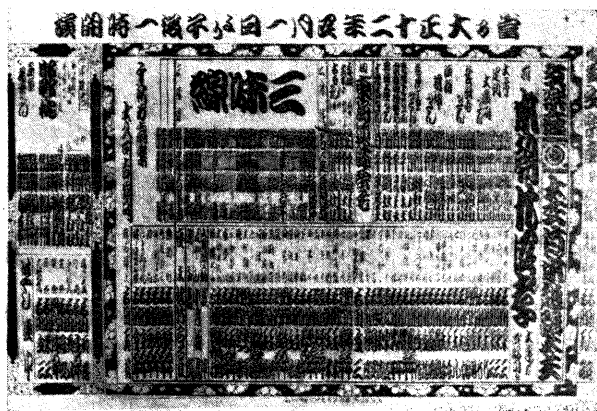
明治十七年一月一日 彦六座新築初興ノ際
仙糸 ■ リ作 名改ノ番附



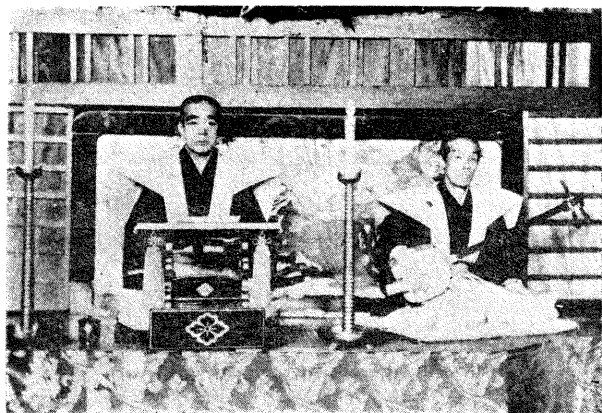
明治三十三年九月 御文樂座へ
作廣ノ名義ニテ染太ヲ彈イテ入座セシ番附



ア於ニ座樂女雲御月一年八十三治明
附番ク彈ヲ椽大津橋本竹テメ初シ名襲ヲ助廣澤豊世六



シヒ賜ヲ彌阿絃庭名メ改助廣澤豊世六
附番ノ行興念紀



竹本 輝太郎

六世 豊澤 廣助



舞台ニ於ケル漫画



郎二猿ト彌阿絃ルケ於ニ屋樂



京上爲ノ行興露披名改ヲ於ニ座富新京東
ス撮社聞新都京東ヲニ縣京東

目次

(到着順)

絃阿彌の追善
 名庭絃阿彌の一代
 そゝの終焉
 柔順な女房役であつた
 氏神のおまつり
 なつかしき思ひ出
 絃阿彌師匠の追憶
 無類の音色
 近世の名人
 三味線屋をおそはつた
 御靈文樂の頃
 私の紡い
 書翰

白井松次郎
 石割松太郎
 高安吸江郎
 二見文次郎
 鶴澤友次郎
 豊竹古鞠太夫
 澁澤竹洗
 豊澤松太郎
 竹本津賀太夫
 竹本叶太夫
 三宅周太郎
 豊澤新左衛門
 豊竹呂昇

恩 師 の 子 供
 妻 の 親 代 り
 怒 と 笑 ひ
 三 味 の 糸
 臨 終 の 言 葉
 絃 阿 彌 の 太 夫 話
 お 稽 古 の 昔
 春 女 や 無 々
 男 師 の 色
 恩 師 の 真 切
 湯 く み と
 瀛 車 の 中
 松 屋 町 の 師 匠
 お け い
 嚴 格 な 方

竹 本 津 太 夫
 豐 澤 猿 糸
 鶴 澤 友 作
 豐 澤 燕 三
 豐 澤 仙 系
 竹 本 土 佐 太 夫
 小 西 い 京
 中 井 浩 水
 竹 本 東 廣
 竹 本 播 路 太 夫
 竹 本 町 太 夫
 竹 本 文 字 太 夫
 豐 澤 猿 太 郎
 竹 本 末 虎
 豐 竹 巖 太 夫

稀 人
 名人としての師の性格
 七 回 忌 に 際 して
 老 人 の 車 夫
 惣 稽 古
 寢 る 時 間
 絃 阿 彌 師 の 丹 精
 故 師 匠 に 就 き ま し て
 三 味 線 會
 文 樂 再 興 の 年 絃 阿 彌 を 想 ふ
 思 ひ 出 づ る ま っ を
 名人絃阿彌翁を憶ふ
 紳士紳商も眼中にない
 恩 師 の 思 ひ 出
 書 翰

竹 本 大 隅 太 夫
 竹 本 源 福 太 夫
 吉 田 榮 三
 豐 竹 嶋 太 夫
 鶴 澤 清 六
 野 澤 勝 市
 豐 澤 猿 之 助
 豐 澤 鶴 助
 鶴 澤 葉
 橋 詰 せ み 郎
 豐 竹 呂 太 夫
 渡 邊 虹 衣 夫
 岡 田 翠 雨
 鶴 澤 淺 造
 豐 澤 雷 助

お　　し　　か　　り
 一　　言　　一　　句
 私が會ふた絃阿彌さん
 書　　忘　　れ　　え　　ぬ　　思　　ひ　　出　　輪
 若手から見た絃阿彌師匠
 連　　中　　の　　會
 入　　門　　當　　時
 線　　香　　の　　薫　　り
 俳　　句
 師　　の　　寛　　大　　舞
 御　　見　　舞
 父の七回忌に際して

豊　　竹　　喜　　昇
 竹　　本　　源　　路　　太　　夫
 食　　満　　南　　北
 竹　　本　　相　　模　　太　　夫
 豊　　竹　　和　　泉　　太　　夫
 竹　　本　　陸　　路　　太　　夫
 竹　　本　　角　　太　　夫
 豊　　澤　　廣　　太　　郎
 豊　　竹　　右　　昇
 高　　原　　慶　　三
 鶴　　澤　　綱　　右　　衛　　門
 貴　　田　　た　　ま
 豊　　澤　　猿　　二　　郎

絃阿彌の遺善

白井松次郎

長い長い人形淨瑠璃の過去を振向いて見るとき、そこにいくたの名人の足跡があります。

それら名人たちの足跡はいかにもシツカリしたもので、今日存在するところの文樂座の基礎を固めてくれたものとも言へるでせう。

文樂座こそは日本の固有藝術として、全世界に誇りうる古典的存在であつて、その價值は動かすことの出来ない確固たるものとなつてゐます。

現に、世界の眼はその藝術的價值、歴史的價值をこの文樂座の人形淨瑠璃にみとめて向けてゐることから考へても、いかにこの古典藝術の傳統のかげに、名人巨匠が藝道のために苦しんで來たかゞ想像されるのです。

と、同時にいくたの名人の足跡の堅實なのが偲ばれます。

私は、その星の如く輩出した名人のうちに近世淨瑠璃史上の巨人として名庭絃阿彌の名を忘れることは出来ません。

絃阿彌師は斯道の權威としてその晩年「松屋町の大師匠」の名を以て呼ばれ、文樂座三味線紋下として天下にその名を馳せてゐました。前名豊澤廣助で文樂唯一の高齡者でもありました。

その絃阿彌逝いて七年、此度新裝文樂座に同じ七年前に逝いた名人竹本越路太夫と共に追善興行を開演するに當り、今更乍らあの元氣だつた『松屋町の大師匠』がしのばれて、彼の文樂座に於ける功績が追慕されます。

彼が、今日の文樂座の新設計を見、開場以來滿郡の人氣を背負つて連日の大入をつづけてゐる盛況と、舞台上に漲ぎる活氣を見たならごんなによろこぶことだろう、また、彼がもし、今日生きてゐるとしたら、きつとこの新文樂座のために大いにつくしてもらつたことであらうと思ひます。

いさ、か追善の愚感を述べる所以です。

名庭絃阿彌の一代

石 割 松 太 郎

近世淨るり三味線の名手、名庭絃阿彌が逝いて七年、この三月十九日が、七回忌に相當する祥月命日であるといふ故を以て、更生の文樂座の彌生興行は、名庭絃阿彌の七回忌追善の興行である。

近く淨曲界の上手名人が相亞いで逝いた。が、竹本越路太夫、名庭絃阿彌の兩名手を失うて文樂座はどみに淋しさを感じたのである。しかも越路と絃阿彌とは、大正十三年三月十八日、十九日と眞に相亞いだ。

この七回忌の追善に際して、絃阿彌の息猿二郎、父のありし形身にとて「名庭の俤」と題して諸家の高文を得て、追遠の意を致さんといふ。私は茲に絃阿彌の一代を叙するの暇を得ないが、彼の小傳を物して、且つ絃阿彌一代中の三つの出來事を述べて、その俤を傳へようと思ふ。

絃阿彌が三味線を以て渡世とせんしたのは、十三歳の時である。父が素人の太棹の三味線を好んで弾いたので、それに依つて絃阿彌は幼い時から糸道は開けられた。安政

元甲寅の年に、猿二郎の名を五代目豊澤廣助——松葉屋の師匠から貰つて斯道に踏入つた。同じく五年には龍助と改名してゐる。後仙糸を名乗つて明治九年九月から、十一年正月頃までは、松島の文樂座に出勤してゐたが何か故あつて、仙糸を大助に返して、自ら「助八」を名乗てゐた時代があつた。

明治十六年十一月は、文樂座にとつては一敵國をなした彦六座の前身——彦六座の瀨踏みが日本橋北詰東の澤の席で、灘安によつて旗揚げされた二回目の興行月であつた。この彦六座の第二回目のこの十一月に助八の仙糸は、豊澤廣作を襲名して、彦六座の三味線の筆上一枚に座つた。この時の三味線欄の紋下は、豊澤新左衛門で、(初代)筆下の止めが野澤勝市であつた。

翌年の十七年申の一月が、博勢町の稻荷北門で、いよく彦六座の旗揚、彦六座としての第一回興行である。この時に廣作は筆下の止めに座つた。廣作の絃阿彌は彦六座の名手として最も活躍したのがこの時代であつた。

明治三十八年御靈社内の文樂座で、廣作は六代目豊澤廣助を襲名し、攝津大椽の合三味線となり、大正十二年四月に近衛家から名庭絃阿彌の藝名を貰ひ、その披露に「邯鄲

の枕」を弾いたが、越えて十三年絃阿彌である事一年ならずして逝いたのである。

これがざつとした絃阿彌の藝歴で、彼を「松屋町」の名によつて呼ぶのは、松屋町に住つてゐたからであるが、尤も二三度松屋町内を移轉したが、その終焉の地は同じく南農人町松屋町であつた。彼の本名は岩崎治助。享年八十三歳。

初め絃阿彌は北久太郎町に住つてゐたが、この時に彦六座の轉退が絃阿彌の身を襲つた。彦六座の座主は灘安を以て呼ばれた寺井安四郎、即ち二代目柳適太夫であつたが、座中の主なるものが、印が、りで彦六座の退轉の巻添へを喰つた。廣作の絃阿彌が一人かぶつて、さうく北久太郎町の持家を賣拂つて、彦六座の借金、印が、りを抜いた。この持家から上汐町の借家に移つた。柳適太夫は印が、りで絃阿彌に迷惑をかけたを顧慮して、彦六座の人形の衣裳、頭の凡てを、絃阿彌に渡して東京に去つた。東京の席を、柳適太夫が、緑太夫をもたれにして打つてゐたのが、この頃の事である。

絃阿彌の後半生の性格が、恐らくこの彦六座の印が、りで一轉期を來たしたらしく思はれる。上汐町の借家に入つてからは、絃阿彌は三味線屋を初めて、自ら家では三味線を張つては、又芝居へ出るという風で一代を消費緊縮と節約とで押通したのである。大

阪市内に電燈が具通した時でも、店は洋燈に、自分が淨るり本に朱を入れるよるは行燈の燈心の火を撥き立て／＼机に親んでゐたといふ風であつた。その身に報ずる事薄うして彦六座の印が／＼の責任を果した絃阿彌は、私が後に傳へようといふ逸事の一つである。

絃阿彌は、身に報ずる事薄く一代を節約に暮したが、その藝統は鶴澤清六に許した。

彼は清六に、己が藝の凡てを譲つたといふてもいゝ位で、絃阿彌の晩年は田中／＼（清六の本姓）で、老後の杖とも柱とも頼んでゐたのが、その清六が老いた絃阿彌を残して死んだ時には、元氣な流石の絃阿彌も八日間といふもの床について、そして溜いきに暮したのである。彼の妻女ゑいは自分の血を分けた二人の息子の死んだ時にも何も因果だ、無い昔と諦めろ、と言つた絃阿彌が他人の清六を亡くした時の咳きを見て不平に思つたといふ話である。いかに絃阿彌が藝の後継者を亡うた事を落膽したかを見るに至る、彼一代の傳ふべき逸事のこれも一つである。

絃阿彌の長子は文造、次は政造といつた。文造は初め梅の川といふ相撲であつたが、後土表を引いて父の業を繼いで三味線屋になつたが、長次子とも夭折した。今の嗣子猿

二郎は三男に入籍している。

絃阿彌の一生において今一つ傳ふべきは、二代目の豊澤團平が、三味線としての櫓下の位置に座らんと願望したが、先輩の絃阿彌の廣助が、櫓下の番付面に一度も座らなかつたから、廣助に慫慂したことがあつた。これに絃阿彌は答へて曰く、三味線で古來櫓下の位置に座つたのは初代團平と師匠の廣助（五代目）の二人限りだ。今自分が櫓下の場所を三人目としてふさぐに忍びない。團平と五代目廣助とは廣大なる名手であつたから——といつて頑として應じなかつたといふ話が傳へられる。そして絃阿彌の廣助は、三味線紋下とは稱へてゐたが、番付面の櫓下には座らなかつた。この例が今日まで續いてその後野澤吉兵衛、鶴澤友次郎と三味線紋下とはいつてゐるが、櫓下の位置は襲はなかつたのである。

尙彼の一代では、その一生を通じて絹物を身に纏はなかつた事。

太夫三味線が、樂屋で繪畫を弄び彩管を揮ふを見ては、淨るりに繪が何の役にたつ、そんな暇があるなら淨るりでも三味線でも稽古しろといひ／＼してゐた。彼の心條の一端が現はれてゐる事。

淨るりの三味線で、所謂大三味線を用いたのが、彌七の大三味線が淨曲界では初めてあらう、この彌七の大三味線を寫して、絃阿彌も仙糸時代に大三味線を用いた事がある「仙」の字を四字象眼してある大三味線が、今も猿二郎の手に、父の形身として残されてゐる事。

——なごを記さば限りはないが、こゝではほんの絃阿彌のありし俤を偲ぶばかりにこそ。

その終焉

高 安 吸 江

絃阿彌翁が逝いてからもう七年にもなりますが、早いものです。大正二年に名人攝津の引退と共に、翁も亦斯界を退かれたのはいかにも尤で、晩年の大様が女房役として此れ程似合ひの人は恐らく無かつたでしやう。あの楠の三、徳太夫内の一段など、まだ演奏せぬ先に、床へ兩人が並んだゞけで、もう其氣分が溢れて居たやうに記憶します。

逸話その他傳ふべきものも定めし澤山あるでしやうが、親しくその病床を見舞つた私は、それよりも翁の最後についてお話することにしましやふ。

十二年の十二月、名古屋で二週間の興行中、歩行は不自由だったが技藝は少しも常と變らなかつたのに、明けて正月十八日頃に感冒の氣味で少々發熱しました。幸に二三日で下熱したものの、便秘の爲めに用ひた座薬が効き過ぎたのか引續きに下痢を始め、終には四五十回も便所通ひといふ始末、おまけに常から癖のある嘔吐氣が此際一層烈しくなり頑丈でもそこは老人の悲しさ、追々衰弱して二月の中頃には口は渴き、食は進まず、脈は亂れるといふ有様となりました。

始めて私がお見舞したのは同月廿一日で、此時は松屋町のお宅のあの薄暗い病室に弱はりながらも元氣な顔を見せられました。蛋白は微量で、血壓は二〇五、まだ浮腫はなく、主治醫と相談の上、診断は慢性腎臓炎並に下痢から併發した腎孟炎といふ事に一決しました。

其後の経過は高齢だけに一向涉々しからず、一進一退でしたが、大勢は漸次増悪に傾き、三月十七日再診時にはかなりひどい瘦せ衰へ方で、其前々日頃から意識も朦朧となり、脈の不正結代甚しく足脊には著しい浮腫が來て居ました。いよいよ全身が衰へきつた事は血壓が一六八に下つたのでもわかります。何しろ八十三の老年ですから是では到

底恢復の見込はないと思ひましたが、果せる哉、其翌々十九日の午後七時二十分、眠る如くに大往生を遂げられました。誠に已むを得ない次第ながら斯界のため實に惜しい事でありました。偶然とは云へ丁度此前日に越路がなくなりました。攝津と共に引退し、終焉を越路と同うしたのも不思議な因縁と云ふべきでしやう。

柔順な女房役であつた

二 見 文 次 郎

私は藝人の家に育ちながら、外の道へ走つたから藝の事は分らない。だから絃阿彌については、確かな觀察は出来なかつたが、何しろ父の爲には柔順なる女房役となつて、忠實に父の藝を助けてもらつたことを、感謝せねばなりません。

父が晩年になつて、多年相三味線であつた江戸堀さん(五代目野澤吉兵衛)と別れ、絃阿彌さんを、六代目豊澤廣助になつてもらつて、弾いてもらふ様になつてから、初めの内は二人ともやりにくい様子であつたが、間もなく息が合ふやうになつて、どちらも喜んでゐられた様子であつた。處が父は七十餘の老齡であつたから、やがて、そろ／＼耳が遠くなつて來て、動もすれば調子を外すことがあり出したので、母を始め御最負の方

々が心配して、聞いてゐても汗が出るといはれるので、私も非常に心配した。

處が絃阿彌さんは、流石に老巧、ぬけ目なく、チャンと呼吸を呑み込んで、うまい工合に調子をとつて、外れかゝる調子を呼びもどしく弾いて下さつたので、お素人のお客には、少しも分らぬやうに、語ることが出来たさうです。これも母や家内から聞いたことで、私には分らなかつたが、何しろ父の引退前には絃阿彌さんにお骨を折らせたものらしい。それで私は常に絃阿彌さんには、少からぬ感謝をもつてゐるのです。

昨年(昭和十一年)の冬十月には、父攝津大椽の十三回忌の法要を営み、哀悼の涙を新たにいたしました。ありました。今や又絃阿彌さんの七周忌を弔はねばならぬやうになり、坐ろに往時が偲ばれて、在りし世の二人の俤が眼にちらつくやうに想ひます。

氏神のおまつり

六世 鶴 澤 友 次 郎

松屋町のお師匠と云へばアノ眞面目な好爺かと口を揃へて申す、皆さま御承知の通り藝以外には何事もない人で、何しろ嚴格な松葉屋(先代廣助)師に對して大久保彦左衛門と云はれた位です、ある時私が「師匠あなたは若い時から女の子から手紙でも貰つた

事がありますか」と聞きましたら、腹の底から聲を出して「めつそうな、そんなく事は生れてから夢にもない」と云はれました、それであなたは長命したのですと云ひましたら全席の者は皆々大笑ひいたしました、又一方お稽古には至極熱心な者で、月謝を出して来る御連中は二三時間も玄關に待たせて置いて、玄人の無月謝者にはどこまでも教授教されます、いかにも藝術家は斯ありたきものと存じます、師が幼兒の頃、松葉屋師匠へ日毎稽古に通はれました修業中、一日稽古を休めました、翌日松葉屋師匠が昨日はなぜ来なかつたと問はれましたので、實は氏神の祭禮で休みましたと答へましたら、大師匠が(馬鹿)祭が飯を喰はして呉るかど大目玉を喰つたど、いつも此咄しをして居られました、よいいまして存じます。本年は全師の七周年に相當いたしますので三月には新築の文樂座で、其追善興行を立派に催したいと存じますと全時に、此思ひ出多き亡師の影なりと踏まして一層藝術研究に務めたいと存じます。

なつかしき思ひ出

豊竹 古 柳 太 夫

年の立ちますと申すものは早い事で、師に御別れ致してより、七年に相成ります。此度

追善興行を、つとめられます由、何より結構な事と存じます。故師には、外様より、より以上私は、御恩を受けました。御断申上ますと、かすかす御ざりますが、故師は、御稽古に附きまして、中々厳格な事は、皆様方の、特に、御承知の事と存じます、私の若き頃、千本櫻すし屋を春はこねどもより親御の氣風残りけり迄を一くさりに聞かして下さりました、是を半月もきいて居りました所、もふやれるだらう、語つて見よこの事でばちばち、やりかけましたが、一口も氣に入りません、二三日内に、半分になり、又夫れが、三分の一になり、仕舞には、一枚がやれなくなり、どうどう、だめだ、やめて仕舞へど、本を、ばちの先ではねられて落第、又御自分の氣に入りますと、よく覺へたと大變に喜んで下さいます。私が住吉へ住居致しましてからは、一番電車が、五時に参ります、それに乗車致しまして、松屋町の御住居迄参りますと、時候によりましては、まだまだ、暗い事が御座います、表のくくり戸の、明けて居りませぬ頃に、出かけても、故師は、早や、朝飯も終り、二階の稽古場の、机に寄られて、本を書き、朱を入れなごして居られます、この朝早く、稽古に参りますのを、大變喜んで居られる様に、いつも御見受け仕て居りました。私は大正拾三年正月興行に、初役で菅原傳授道明寺の段を勤

めます、此の時に、御稽古を願ひましたのが、御別れで有りました、私が今日迄舞台を勤めさして戴いて居りますのも、私の師匠先代故津太夫師は申すに不及絃阿彌師及び故三世清六師のお蔭と、日忘れした事は、御座りませぬ。此の度七周忌追善を、新らしき文樂座にて、行はれます事は、定めし亡絃阿彌師匠も御喜びの事と存じます。

絃阿彌師匠の追憶

澁澤竹洗

猿二郎君がやつて来て、来る三月に先考名庭絃阿彌師匠の七回忌を営むにつき記念のパンフレット……いやパンフレットは少々不似合だが、猿二郎君はお伽淨瑠璃や淨曲お伽歌劇というく／＼な新らしい考案なぞやる斯道の新人故却て夫がよからう、兎も角も「なにわの俤」と云ふ心入の印刷物が出来る筈、僕にも何か書けとの事だが、藝の事は既に世間周知の事故僕等が蛇足を添へる必要がないから云わぬが、小男ではあつたが頗る丈夫で藝道に熱心で嚴格で勉強家で、玄人のお弟子は勿論素人にもなか／＼八釜敷、稽古臺の前ではむつかしい顔をするが間は頗る目に愛嬌のある親みの深い可愛らしいおぢいさんで、又特に僕の目に残つてゐるのは體の割に左右の指殊に右の親指がひどく立派に發

達して大きがつた事で、之は若い時の藝道勉強を雄辯に物語つてゐるのだらうと思つた。夫に年を取つても目と耳が如何にもたしかで夫につき面白く思つたのは、僕が昔杉風會と云ふ天狗様のお守先達となつて師匠の弟子で之も藝に熱心な富助と云ふ師匠を大師匠の推薦で東京へ来て貰ひ永い間稽古してゐる時の事だが、或時一所に松屋町の内を尋ね富助が新薄雪物語の鍛冶屋の段と云ふ古い淨瑠璃の章を見せて貰ひ教を受けて居る側で僕も聽いて居て、ふと見ると富助の方が眼鏡をかけ師匠の方は何んにもなしでやつてゐるから首丈見るとどつちが年上で師匠なのか分らぬと云つて大笑をした事があるが、此富助が大正七年の春病歿し其追善を翌年一周忌に催す事となり一番の御手向として絃阿彌師匠に態々上京して貰ひ、忠臣藏の茶屋場と道行八ッ目とまさか一と晩の内でもないが彈ひて貰つた事がある、其道行の稽古の時長い道中を無事に着京宿屋へ落付く間もなく直ぐ稽古と云ふ譯、怪しげな太夫連と三味線の弟子達を大勢集め「七里の渡し帆を上げて櫓拍子揃へてヤッシッシ」と何度もく／＼ソラ来いとかばかり、相撲の大關が取てきをもんでやる様にヤッシッシと稽古して呉た其元氣其根氣而て其熱心な且那藝の慰み事に對しても決していやしくもしないと云ふ事をつく／＼敬服し又感謝して居る、尤太夫さん

が太夫さんごて何度やつても本式に合う筈はなく余計に骨を折つて呉た次第と今以て恐縮して居る之が大師匠に對する思出である。

無類の音色

豊澤 松太郎

私は三代目豊澤濱右衛門の弟子でしたが、師匠がなくなつてからは絃阿彌師の處へ預り弟子として御指導をうける事になりましたが、其の當時は仙糸といつて居られました其の後、一時廢業して義太夫關係の商賣をして居られましたので、私は五代目廣助師の處へ預けられて居ましたが、暫くの後、再び絃阿彌師が淨瑠璃界の人となつて六代目豊澤廣助を名乗られて斯界に重きをなして居られました、そして七代目廣助は私が繼ぐ事になつて居りましたが、何分にも未だ若輩の三十才台でしたので、せめて四十才台で有つたらばといふやうな話で其儘になつて了ひました。尤も其頃私は組太夫と一緒に二回上京し、后、朝太夫さんと永らく在京して居りました爲め、下阪の機會を失して了ひましたので、絃阿彌さんの晩年は近くに居りませんでした。

三味線の音色は實に無類で、只々感激の外は有りませんでした。稀に見る名絃手でし

たが、非常に短氣な性分の方でしたので、稽古の折は何時も弟子達はふるへ上つて居たものでした。今年存命ですと丁度八十九才になられる筈ですが、七回忌と聞ひて今更乍ら故人の偉大さをしみじくと思ひ合せられます。

近世の名人

竹本 津賀太夫

六代目豊澤廣助改め名庭絃阿彌師の七回忌にあたつて、子息猿二郎さんが（なにわの俤）といふ本を發行されて、名人絃阿彌さんの逸話その他故人をしのぶいふ話を書いたものを頒布されるので何か書けといふのですが、筆無性で話下手な人間ですから纏つたお話ができませんが、近世の名人として、自他共に許した人で私どもが何か申し上げなくとも、多數の方々からいろいろ面白い逸話とか、美談とか、其他のお話が多々あることゝ思ひますから、其の方は皆さんにお任せいたしましたして只子息豊澤猿二郎さんが此の名人を繼ひてより以上に名を擧げられる事をこの機會に一言申し上げさせていただきます。これも皆淨るり界の爲めであると思ひます。

三味線屋をおそはつた

竹 本 叶 太 夫

松屋町の師匠は代々松屋町で三味線屋を営んで居られました、職人堅氣とでもいふやうな御性格が稍ありました、藝人じみた華美な服装は一切せず、染太夫氏を彈て居らるゝ時分杯は綿服がおもで、萌黄木綿の風呂敷に撥を包んで無造作に背に負ふて、文樂座へ往復歩かれました、後年攝津大椽師の三味線を弾かるゝやうになつては、追に三味線屋商賣も止められ、紋付の羽織を着て樂家入をなさるゝやうになりました、併し總て極質素な御性質でした。晩年に藝連のあつた方で所謂死華を咲かされた、斯界の高徳者であられました。師が廣作時代に私の弟が入門させて頂き、豊澤作次郎と命名され随分面倒を見て戴きました。私は又明治四十年頃三味線屋商賣をしてみたいと御相談を致しましたら、早速御承諾下さいましたので、その翌日から辨當持で半月ばかり御厄介になりました、皮の張り様から三味線の故實等を細々と御教示に預りました、その後都合で三味線屋は致しませんでしたけれども、その御庇げで糸張りの工合や、サワリのきりやうなどを覚えてしたので、今日まで人の用にもたて我要にもたつて寔に有難いなどと存じ

て居ります。世間では松屋町の師匠といへば、至つてむつかしい剛い人だと傳へられてゐるやうでしたが、私は少しもさうは感じませんでした、寧ろ却て茲父のやうな感が致しました、と申ますとは、年季奉公で習ふ商賣でさへも無報酬で親身に授へてくれました。惟ふに何といつても今時の輕薄な世の中の人と異ひ、義理人情味の深い、第一正直で、淡泊で、さうして至極親切な方であつた。彦六座の經營難の時など資産を投出して随分苦勞や損もされたさうです。師に三味線を彈いて貰ひましたのは、染太夫様の替り役で濱松を三回、それから先師攝津大椽が病氣で一日でしたが新口村を彈いて頂きました、引合せの隙がないのでその儘語りましたが、見物を大事と思はれてか氣持やう稚子の手を引くやうに、こちらへくといふ様に彈いて下さいました、實に勿駄ない事でした。絃阿彌名披露は文樂座で致されましたが、地方披露には大阪十二年十二月岐阜と名古屋へ行れました、即ち岐阜は松竹座四日初日で七日まで、名古屋は御園座八日初日で五日間、師の役場は千本の道行、廿四孝四段目、忠臣藏道行、何れも掛合、此名古屋の興行が師の最後の舞臺でありました、その時の御附合の太夫は私でした、斯う思ひ出しますと一入師の御冥福を心から、御祈り申さずには居られません。

御靈文樂の頃

三宅 周 太 郎

私は少年の頃、むつかしくてよく分りもしないのに割に多く御靈文樂座を一人で見に行つたのは、それがひる間の興行であつたからだ。即ち、大阪の私の親類の義兄がやかましくて、好きな芝居だと、夜おそく歸るために苦い顔をするのが、文樂だとひる間が主で、夕方七時位にはすまして歸つて來られる。今なら野球を見に行く位の眞つ晝間だけに、ついそこへ行くするい工夫を思ひついたのであつた。少年の芝居見物を干渉される窮餘の一策に、ひる間の文樂見物を考へついたわけだつたのである。

攝津大様の「中將姫」、「安達ヶ原」、その他いくつか晩年のものだが私は聞いておいでいゝ事をしたと思つてゐる。と、あの大様の翁の面のやうな顔と共に、廣助翁のやせぎすな白い小さな顔も目の前に浮んで來る。勿論、床の火は燈燭で、小屋の入り口のつい先きは、東京の立見のやうな風の幕見の見物が、うんかのやうに押しかけてゐたものであつた。確かそれが二錢とか三錢の幕もあつたと覺えてゐる。——少年の私には唯大縁と廣助と（絃阿彌）が、何となく神々しく思へた。二人共年寄りで、床の上の姿が妙に

上品だつたからである。

▽

△

併し、東京の大學の學生々活に這入つてから、この絃阿彌が中々のやかまし屋であることを聞かされた。近年殊にさう云ふ噂が本當だつたのを、文樂の人々や子息猿二郎氏からも委しく聞かされたのである。

けれども私はこれはいゝ事だと思つてゐる。義太夫のやうなものは、結局底なしの井戸に比すべきで深さははかり知れない。分れば分る程むつかしい。さういふ性質の「禪」に似たやうなものだ。これはやかましくいふ方が本當で、義太夫をあつさりと小唄同然に扱はうとする一部の主張は、根本から間違つてゐると思ふ。

で、今になつて思ふ。絃阿彌が人に教へる稽古が口やかましく、手きびしかつたと云ふのは、元來義太夫がさうあるべきものだつたからだ。つまり、翁はその教義に味到してゐたからこそそのやかまし屋だつたのであらう。

東京へ文樂の一座が來てゐて、その興行の様子を私などが見てゐると、今日はもうさうやかましく云ふ人が、文樂の樂屋内にゐないやうに思ふ。或は若いお弟子達が、やか

ましく云ふと辛抱しないからであらうか。が、私はこれを齒がゆく思つてゐる。義太夫だけは「擊劔」か何かのやうな心がけがほしい。それだけに文樂に今でも一人のやかまし屋がほしい。名題のやかまし屋絃阿彌翁を何とかその叱言だけでも、地下からラデオか何かで送れぬものかなどさへ思つてゐる。

私の幼い頃

豊澤 新左衛門

絃阿彌師匠はけいこがやかましく又いたつて子供又弟子をかわゆがる方でした。明治十二三年頃と思ひます、前の御内室に子達がなく女夫中はうらやましい程むつまじく、只子達がないのを悲しみ居りました。其頃は北久太郎町一丁目に生まれ、私は松太郎師に弟子入して間もなく、同師四國方面へ巡業するについて、私を御師「仙糸」ゑあづけて行かれ、私も其後は毎日通ひ手はごきをしてもらひ、御夫婦に一方ならすかわいがつてもらひ、今夜は内で泊れ、又今晚もと一年余りは泊めて下され、御二人のまん中でだいてねてもらいました。其位かわゆがつてもらひましても、けいこになると、しかり飛され、御内室にあやまつてもらひました事は、何ん度あつたかかぞへられません。所

がおもひがけなく御内室の妊娠、其時の御二人のようこびは口や筆ではかけません。月満ちて生れなかつたは男の子「文造」御兩人は天にも登るよふな大よろこび、門弟衆又私供迄が夜が明けたよふな心持でした、所がひだちが悪しく程なく御内室の御死去、子がほしいと毎日のように云うて居られた子達が出来るや御内室の死去、其時の御なげきはそばで見えて居られませなんだ、其後年月が立、文樂座へ入座せられ私はやはり彦六派の方に出勤して居りました、後近衛家より絃阿彌と云ふ御名を頂かれ、文樂座で名廣めに私も席をけがさしてもらいました事は非常に悦んでをり歟、實におしき方であり歟。

書簡

豊竹 呂昇

此の度亡師匠七回忌に際し「なにはの俤」を御發行御追憶の一端に供せらるゝ由實に御名案と奉存候右に付妾迄も何か書出す様の御下命光榮に奉存候へ共例に依り先般來病臥致し居り只今の處貴意に副ひ兼候次第何卒御諒察被下度幸ひ早く全快致し御發行迄に間に合ふ様ならば早速御届け申上候先は右御返事迄草々

恩師の子供

竹本津太夫

廣助師より私が初めて稽古をして戴いたのは妹脊山三段目の久我助を御靈文樂座で勤めた時で大判事が染太夫さんで定香を越路さん雛鳥は南部太夫でした。其の後引續き稽古して戴きましたが、其の内で一審六ツケ敷くて亦固つたのは日向島でした。之は柳店柳適太夫さんを座六座時代に廣助師が引かれたのを知つて居りますので、稽古に参りました。丁度其時私が御靈文樂座で初めて日向島を受取つたので、しかも文を一週間の休の中に覺へぬと初日の間にあひません故一日に三回も稽古して五日間で覺えました。亦日向島の枕に松門の謠がありまして、柳適さんは亦此の謠が特に味かつたのです、それは柳店で素人の時代から謠の名人で、この特意の謠で松門の枕を語られたのです。併し廣助師は文は淨瑠璃であるから淨瑠璃の謠で宜敷と言はれましたが、私も本業の謠で語りたいので、天下茶屋の鬼一左兵衛といふ謠の先生に稽古に行きました處、廣助師は私は柳適さんの通りを教へたのに、鬼一さんの處へ行つて、ごつち共付かぬものに成ると小言を言えたので矢張り廣助師に習つた通りで語りました。元來廣助師は昔堅氣のきつち

りした方で、をべつか等は決して言はぬ人でありましたが、此の時は褒められました。私が直接には聞きませんが他の人から聞きました、流石は小供からの太夫じや、あんな六ヶ敷ものを五日でよく覺えた、あれでこそ太夫じやと云はれました。亦大變喜んで禮を言はれたことがあります、それは猿二郎さんの兄さん、故文造さんの事で、十六七歳の頃二十三貫もある体格でしたので、角力取りにせられたら如何ですと進めまし處、それでは角力取りに馴染があるかと言はれますので、私の親類同様の交際をして居る九郎衛門町の故淀治三郎さんが幸ひ雷權太夫の知合の處から頼んで梅ヶ谷の弟子となり、梅ノ川文藏となりましたが、脚氣で歸阪せられまして不幸にも、三十一歳の若盛りで、なくなりました。

妻の親代り

豊澤猿糸

六代目廣助師が近衛家より名庭絃阿彌と言ふ名稱を戴かつたは斯界全般の一大名譽であり舛。師と私家とは色々な方面で密接な關係があり舛。私の妻の親代りにも成つていらるゝので、師の逸事は澤山あり舛が、どうせ幅奏する事とおまひ舛。一般に稽古の嚴格

さは(素直とも)別でした。上下老幼は申に不及師にしては今の我々に對し齒がゆく思はれるので。私が古鞆氏の一の谷流の枝を弾く時は丁度師は病床にあつて枕も上らぬ程でしたが、起上つて手を取る斗りの御教訓、其時は實に嬉しく涙ぐましい程で、おかげで無事に勤めましたが、一手／＼或は極め／＼を親切に教はりましたが、斯言事は今の文樂座員全部の事と思ひ舛。師は性來酒を吞まれず甘黨の方でしたが、身持も至つて宜敷只藝道一心に精進されたので晩年攝津大椽師を彈れて全師引退迄勤められしは我々一門の光榮で肩身も廣い心地です。未だ／＼逸話も澤山あり舛が……………皆様から言はるゝ事と思ひ舛故是で擱筆いたし舛。

恕と笑ひ

鶴 澤 友 作

大なる人物には大なる矛盾が有ると云ふ事が本當とすると、名庭絃阿彌師は慥に大なる人と云わねば成りません。全く大なる矛盾の持主で有りました。其經歷を見ましても彦六座に立籠り文樂座と戦ひつゝ有るかと思へば越路太夫の大傘下に馳せて文樂座に根を下ろす、全くの矛盾。々。然しそれを統一する大なる意志を持つて居られました。其大

なる意志が後年を大御所の地位に迄偉大ならしめたのでしょ。ばんばり。その名を奉られたり。權勢の權化の様に云われましたが其は自己の確信する所に敢然として猛進する勇氣が敵を造つた爲でしょ。稽古の時血氣盛な者を叱り飛ばす元氣、眞に雷神とは唯が云ふたのか、が全く適當な詞です。然し其叱る詞の中に何共云へぬ可笑味が必ず有りました。師の病に革り門弟達が交互身体中を、さすると云ふ苦しい時でも、門弟達がつい居眠でもしよ物なれば、居眠らずと、さすつて呉れ、居眠ると共に奈落へ連れ行くぞぞ死生の境に有つても可笑味は失なわれませなんだ。恕と笑を持つ師。極端な味方と極端の敵を持つ大なる藝術家。頬の落ちた白髪の持ち主は、何の彼のと文句は云ひましたが文樂の重任を、せをい立つに、不足の無い大黒柱で有りました。眼を閉じて顔中の皮をびりびりと動かし、齒を打たゝいて雷を落された姿が今でも目先に直ぐ浮ぶのは、大なる者の倒るれば大なる響有りとの詞の通り、大なる何かが頭に響いて居る爲では有りませんまいか。私は故人を禮讃すると共に其靈に對しまして謹んで敬意を表します。

三味の糸

豊澤燕三

御師匠の逸事を思出せば澤山ありますが、私がいまだ忘れられぬ事はいつも上京土産に三味線の糸を下されし事です。これまで先輩から種々御高價の品を頂いた事もありました。夫れはごうれしくありませんが、師匠より糸を頂きし時は實にうれしいと全時になんでも勉強せよと意見をいられている事の下をに今以て忘れられません。

思出もなみだのたねや春の雨

臨終の言葉

豊澤仙糸

逝かれた師匠の思ひ出、いろ／＼澤山ありますが中でも私が今日までの長い生涯の中、一番苦しかつた事を申し上げます。それは私が十六の時、今からザット四十年の昔語りです。其時分は師匠はまだ廣作と名乗つて居りました、朝太夫氏と師匠が眞で東京へ興行に行つた時の事です。二親に甘やかされて大きくなりた私はそれが臍の緒を切つて初めての旅興行です、一座は

朝太夫、廣作、新靱太夫、仙次郎、生島太夫、市造、十八太夫、富助、菅太夫、團八組の太夫(今の君太夫)と小作(私の幼名です)

興行契約は一年位だつたと思ひます、一座は烏森に合宿所みたいな大きな家を借りまして、下女一人が澤山の人々の兵端部を引受けてゐる譯です。其後其合宿所が類焼の厄に遭つて新に楯籠つたのは銀座尾張町の裏側です。下女の補充として雑役に使はれたのは私です、師匠は朝起きでしたから六時には起きねばなりません、毎晩寄席のハネるのが十一時、其時分は乗り物といへば人力車、それも下廻りの私等には絶対に許されません。テク／＼と歩いては宿に歸ります。寄席の場所の都合では三時四時になる事も珍らしくありません、四時から六時まで——睡眠時間は僅々一時間、此時の辛さは今に忘れられぬ思ひ出の一つです。一月から興行して五月にはどう／＼脚氣に見舞はれて歩行不自由それでも厳格な師匠はそれが修行だといつて決して甘い顔は見せませんでした。私も弱音を吐くのは大嫌ひ、倒れて後止むの決心で九月まで辛抱しましたが病勢は進むと許り遂に「鶴仙」といふ最負の女將さんが大阪へ歸るに就て其人に連れられて大阪へ引揚げました。驛に出迎へて呉れた女親は余りに私の衰れ方にボロ／＼と涙を流してゐました。

併し其苦勞も後には報はれて今から七年前、師匠が臨終の砌、枕近に私を呼んで「お前には辛い目をさせて濟まなんだ、アノ時に俺が甘い顔を見せてたら決して今日の仙糸にはなつてゐなかつた」としみ々と仰有つた時には其温い言葉が嬉し涙に變りてかばかり深い師恩に目の裏の熱くなつたのが感ぜられた位、私の終世忘れる事の出来ぬ、シーンとして今に眼前に彷彿たるものがあります。

絃阿彌の太夫元

竹本 土佐 太夫

眞に熱烈なる藝人氣質であつた、絃阿彌さんは物に遲凝しない活達な人であつた。思ひ立つた事は即決しないと氣がすまぬといふ風で、夫が爲めに事を誤まる怖れもあつたが、敏活に運ぶ功能もあつた、一口にいへば一徹な人であつた、そしてこれが成功の基でもあつた、

廣作といはれた五十三歳の時、自分の藝の進まぬのに愛想を盡して、清水町の師匠（團平師）に向ひ「私はモウ三味線彈は止めて三味線屋を專業にします、自分の藝の至らぬのが判りました」といはれると、清水町の師匠は之を聞いて「廣さん、おまはん幾つち

や、ナニ五十三、それ見なはれ、まだ若いぢやないか、藝人は五十以上にならぬと眞の味は出ぬのぢや、そんな不甲斐のない事いはずにシツカリ遣んなはれ」と勵まれた。そこで一層奮勵して藝をみがき、遂には攝津大掾といふ天下の名匠の相三味線ともなられたのだ。

明治廿九年稻荷座が維持困難となつた場合、絃阿彌さんは團平師と謀つて資本金をこしらへ「猿ヶ嶋敵討」を一興行、自分が請元となつてやられ、自身が木戸に坐つて札を受取ながら、大勢のお客に頭を下げて丁寧挨拶をせられた事がある、夫れは慾でも何でもない、藝道の爲め、太夫や三味線や人形遣ひを救ひたい爲めの義侠であつた。

明治二十二年彦六座で「日蓮記」を出し、團平師の夫人千賀女が新作の日蓮記を附けて其中龍の口と博多法性寺の段を朝太夫さんが語り、夫れを絃阿彌さんが弾くことになつてゐたが、朝太夫さんが初日から病氣で休まれたので、其時分まだベイ／＼の下廻りであつた私を選まれて、其代り役を勤め、絃阿彌さんに弾いてもらつた、私は其時分からお馴染だから、互に氣心も知り合つてゐた、

夫れから後久しく一座をしなかつたが、私が文樂座へ這入て「千本櫻」の渡海屋を割

當られた時、絃阿彌さんに稽古してもらつた、先づ私が口を割つて見ると「ウムこれなら遣れる」といつて熱心に教へて下され、立稽古惣稽古にも附そうてゐて、親切に教へて下すつたが、何しろ藝にかけては熱心であつた、それだから人を教へるにも火のやうになつて叱つける事が多い、教へるは上下の隔ては少なくなつた。

文樂座へ這入つてからは、樂な氣分になられ遂には同座の三味線の大御所ともなられたが、彦六座にいまだ先輩が多かつた、夫れに修行盛りでもあつたから、随分苦勞をせられたので有る、藝道ばかりでなく、座の維持經營にも盡力せられた、藝道にとつては功勞の多い人である、一代の逸話を調べたら、優に一篇の立身談が出来るかも知れぬ、そして淨瑠璃史の材料にもなるので有る。

私が近松座を去つて文樂へ這入るについても、絃阿彌さんは早くから私を勧誘せられ裏面から度々交渉をしてゐられたからいよ／＼入座ときまつた時には、非常に喜んで「これで私も本望ぢやモウ私の仕事はすんだといはれた、貴田さん(三代目越路太夫)も入座を歓迎して、表面からも、裏面からも斡旋して下すつたが、絃阿彌さんは一層盡力せられたのでした、仙臺へ巡業してゐた時など態々長文の手紙をこして入座の事をすゝ

めて下すつた事も有つた、一時私が相三味線に閑つた時など「若し弾く者がなければ私が弾く」とまでいはれた、それほど親切にしてもらつたから、私は絃阿彌さんに對しては深く感謝して居るのである、私をして絃阿彌さんを一口に評せしむれば「熱誠其物の如き藝人であつた」といふのである。

お稽古の話

小 西 い 京

故絃阿彌師の藝術の大偉人である事又逸事も澤山でせうがそれは各方面から投稿があらうと思ひましたから私は師匠に稽古をして貰うた實見をお話し致します、多少斯道の參考にもならうと信じます。

文樂座で伊賀越の出る時、津太夫氏が八ッ目を語るので調べに来ていた、あとへ私が稽古にいた所、師匠は津太はん恰どよい是からい京はんの稽古するから聞して貰いなされど言はれた津太氏も世辭のよい人で、夫れでは聞して貰ひませうと、居住居を直された私は大變氣の張つた事じやと思ふたが、中を聞して貰ふているのだからと直に師匠の前に据はつたら、師匠の言はれるには、けふは前のおさらへをしてあげやう、とは意地の

悪い師匠じやと思ふたがもう仕方がない、勇氣を出して語り始めたが（既に其夜もしんくんと遠山寺に告渡る）迄が二十分や三十分間位で次へいけぬと言ふ稽古振りで、歩き迄殆ど貳時間もかゝつて、ヤットすんだが詰らぬ淨るりを聞かされて津太夫氏も辛かつてあらうが、當人の私も随分苦しかつた、けれど教へて貰うている私に見ればとても直されたは結構で、一遍に頭まへ浸込んで無形の寶らを得た譯であつた、（日向島の肩に引かけゆく力らも）何度言ふて貰うても言へぬので、三日目に師匠が（まだ解らぬのかよく文章を読んで考へて見よと半叱られて歸つてから文章の前後を味うて見て成程私のは強すぎたと氣が付て其翌日（行く力らも）を力らを入すに言ふたら夫れで通過した、稽古すんでから師匠に質問した、二三日前から語つていましのは何處が悪かつたのです、今日は一寸力らを抜いてやりました丈です、夫れでよいのじや、此間だから言っているのは（行く力らも）のものがチンと弾くうけに觸るからいかぬ、次の文句が（甲斐も諸さの小夜千鳥）の糸瀧の文章になる、だからコノチンに聲がさわつてはコツリコして甲斐も云々が引立ぬ只もの一字じやが斯う所は淨曲の行賢の要めであると説明を聞かれナーダそんな事なら始めの日に言てくれたら二三日も苦しまないでもよいに意地の悪い

師匠じやと、内心で思ふたが、ソレハ大いなる私の了見違ひであると悟つた、平素師匠の教黨に（教わつた物は熟練と研究を積んで自分の代物にして語れ、然し土臺を毀さぬやう自分の力らで充分に伸張せよ、習うた通りを鑄型に簾込んで仕舞うてはより以上の名人上手は産出せぬ譯である）毎度言聞されているは是しや自己の技倆を思ひのまゝに發揮させ研究心を自發的に奮起させると言ふ點は此所にあると大いに覺醒して私が總てに研究する事になつたも師匠の薰陶の賜ものと今更ながら感謝している次第です。是も日向島の（左次も涙にかきくれながら）以下（詞をかわさんと思はすか）迄の長い左次の文句が明瞭に言へませんコレが地合か詞なら言へるのですが左次の地色ですから人形の性格を活かさねばならぬ、毎日随分困りました、或日師匠の言はれるには（そんな言振りではどうなに口捌きのよい者でもマクレて仕舞、加之假令言へても味もシャ／＼りもない、コレハ左次の地色で抑揚と歩調に拍子を付けて語れば明瞭に情味も語り活せる（元來何を語つてもマクレると言事は決してない、いくら早い詞でも立派にマクレずに言へるやうに出来てあるのじや、練磨と口遣いと拍子の廻びとを充分研究したらよいのじや）と教へられてから熱心に研究する事になり尙且マクレるものでないと確信が出来

てからは總てのものにマクレぬやうになりました。まだ／＼こんなお話しなら澤山ありますが、先づ是だけにして置ます。

春 や 昔

中 井 浩 水

『鯉魚にて一つ飲むべし玉菊忌』とは『もゝ羽搔き』に題した抱一の句である、絃阿彌翁の枯談には

三味線に枯華微笑の春淺し
と手向け度い



攝津大掾の童顔、名庭絃阿彌の清瘦、さうして二人とも阿羅漢のやうに眉毛が長がかつた

命毛の春や昔の翁どち



太夫の多い時代もあれば三味線の多い時代もある、今の文樂座は三味線まさりの時代

である、この沃土を作つた耕夫は即ち絃阿彌翁ではあるまいか

松屋町といふ名にし負ふ春の人



越路太夫が世を去つて數日にして又この翁の訃音に接して驚いたのも早や七年の過ぎし夢である

涅槃像若男けんびし哭し居る



今年新年鰻谷に新文樂座成つてコケラ落しを興行す、絃翁地下にあつて莞爾たるものあるべし

この道の冴え返りけり鰻谷

男 女 無 く

竹 本 東 廣

故名庭絃阿彌師匠様にわ御在世中一方ならぬ御世話に相成りました。

私といたしまして度々思ひ出しますのわ藝事にわ大變御熱心な師で御稽古に御師匠様の

御宅へ朝早く参りまして、いつでも稽古場に御出ましになつて居られた事、私等如きものに御師導下さるにもナカナカ嚴格で決して男女の別ち無く充分腹に入る迄御教へ下さつた事など種々思ひ出しますと得がたき御師匠様であつたと心から敬意を申述べます。亡師の御年忌に臨み御法會を謹しんで御追悼申し上げます。

恩師の色々

竹本 播路 太夫

私風情が御師匠様の事を申上るのは誠に恐れ多い事で有ますが何分永らくお宅で御厄介に成つて居りました故御家庭にての御様子を少々述べさして貰ひます。と申て余り古い事は存じませぬが兎に角本當の藝人とは絃阿彌師の事でしやうか、淨曲の御研究の外は何の趣味もお持にならない方で、元日から大晦日迄只三味弾くのが何よりの樂みで有る又こんな面白い事はなんで外に娛樂を求める必要が有る物かとよく仰せられました、ですから人に稽古するのは誠におすきでした、取分初心者を仕込のがお好きな様でした。それなのに未だ淨るりの事がさつぱり分らん／＼と丸で嘘の様な事を眞劍に云て居られました。朝は五時か六時迄にお起きに成り、先づ第一に各神様へ御禮なされ皇室と國家の

御安泰をお祈りに成、續いて佛前で故師匠方や御先祖の御回向と斯道の發展を願はれます。夫れが大きなお聲ですから一々よく分ります、其間が約一時間、御朝食後文樂座が朝から始まつた頃は例の通り大序の始まる迄に人力車でお出に成り序切時分にお歸りに成ります。又此車屋さんの來る時間が六ツかしゆございます、大たいがいらちの方で瀛車にお乗りの時などは發車時間の一時間も前に驛へお出に成ります。人に待たさるゝ事は尤もおきらひですが人を待たす事も大きらひで、車屋などが來るのが少し早過ぎてもせわしないから返して置とやかましく云れます、と申して若しをくればは大變ですから早すぎる位にして置てお目に掛らぬ様横町に待たして置き、よい時分に今來た様に申上るので有ます。しかしお弟子達は早く來ないとしかられます。お晝までがお弟子達のお稽古、午後は旦那方のお稽古、其間々に調べ物をなさいます。御夕食後に御運動の爲か慰安の爲か和泉町松屋町の角の木村さんと云岩おこしやのお宅へ毎日必ずお出に成り、きまつた様に店の間で表通りをながめておすわりに成り、二時間程お話をしてお歸りに成り九時頃おやすみに成ます。冬の寒さのはげしいのは中々我慢なさいますが、夏の暑さの厳しい時はあつい／＼とやかましく云れました。マワシは必ず御自分で洗濯なさいま

した。御食事はあぶら氣の少ないあつさりしたお肴や野菜物がお好で、取分やわらかいかしわが一等おすきでした、牛肉は絶対に召上りませんでした。尤もお食は小食ですがよくお腹のすく方で、サアはらがへつたから喰ると云出されたらお汁などあたゝめて居る間も待たれずやかましく云れます、丸でお子達の様でした。お酒は一口もお上りなくたまゝ酒のかす一二枚焼て召上るとア、酔たゝとふらゝして居られました、よく且那方が何所かで御酒を召上つてお稽古にお出に成ると早速例の線香を澤山お立に成、横向てお稽古なさいます。總体鼻の神經の高いお方で、一度大分重い腎臓病に掛られし時鼻の神經が恐ろしく過敏に成しと見へ枕邊に有物が皆くさいゝと云出され、ふとんから夜着、枕から煙草盆、床の間の置物まで別のと取替ても、やつぱり臭い悪い香りがすると云はれ日頃おすきな線香が又非常に臭いらしく果は家中の物が臭くてたまらん故ごごぞへ出て行くと云出され、南本町の松本病院へ頼んで入院なさいましたら又其病院の臭い事は自宅よりも數倍悪いにはいがする故たまらぬと仰せられ醫者や看護婦のともるも聞かず早速其日に退院なさいました。其夜は夜通し鼻をつまんで居ました、其翌日兩替町の呂太夫様が見舞にお出なさいました。此お方は誠にお話しのお上手な方で、實

は自分も其鼻の病氣をわづらひました、誠につらい病氣であります、空飛ぶ鳥迄臭い感じがしましたが、夫は物のにはでなく鼻其物がにほふので有ます、或時日さへ經過すれば自然に治りますと、上手に説いて下さいました故始めて得心致され其後は御自身で鼻をつまんで我慢して居られました、一週間余りで其鼻のにはひは取れました。尤も其間は何一つ召上られませんでした、皆も不眠不休で介抱なさいましたが師匠も余程よわられました但其お苦しい中でも淨瑠璃の事は深く念頭に置かれ、サア今私の苦しんで居る息づかいをよく見て置け、一般淨るりを語るは皆引息で語る物で有るが、手負と病人に限り出る息で語る物で有る。お前などは皆反對で、手負や病人を語る時は堅く成て強すぎる、かんじん強く語るべき時はきばり過て自分がつかれる故ふうゝ云て出る息で語つて居る、自分はきばつて強く語つて居る氣でも前へは誠にやわく聞へる、よく心得なければいかぬと病苦の中からおさとし下さいました。力らのない私等には只聞して貰ふて置ただけで有ますが御教訓の程は實に有がたい極りで有ます。

一般仲間の方で絃阿彌師匠を誠にこわい師匠の様に思はれる方が有ますが其實大變親切なお方で又藝以外の事は至つて無邪氣なおやさしい御師匠様でした。申上たい事は澤山

有ますが此位いで失禮致します。

湯くみと眞切り

竹 本 町 太 夫

故名庭絃阿彌師匠の追善に御生前性行の逸事を少しお嘶致します、師匠は我藝道一心の御人にて幼年の頃より藝道に於ては如何程熱心に勉強された御人かと今更乍思はれます。我々共も度々御稽古願つ事有ますが、いつも朝早くこいと申されるので、寢すごした折は寢起のまゝ飛で往て稽古臺に向ひしかられて目がさめる様な事も有ました。文樂の惣稽古の如きは特に早く御越に成、一々耳にして意に叶はぬ時は多勢の中でもんもほろゝにしかり付て教られる事まゝ有ました。中には多勢の中であれ程迄にしからひでもと申される方も有ましたが能く考へれば師匠は藝道一心の人だから御自心の意に叶はねば前後の考へなくしかり付て教られた事だと思はれます。そう云お人だから自宅へ御稽古に見へる且那方でも稽古は自身の門弟や中間の者同様にやましく傳授されたお人です。或時深いおなじみの且那がぶきやうじやさひごくしかられた爲御立腹されて稽古止ますと申され師匠もお止なさいと既に喧嘩別で自宅へ歸られておれは今日師匠に大變しから

れたから淨るり稽古は止る積りだと申された處奥様も娛樂の事にそれ程しかられたら却つて氣を痛めるからおよしにしたが宜敷と云れ其まゝ寢間へはいり、つくゝ考へられおれに能く教へてやろと思へばこそあれ程やかましく云てくれるに是を腹立てるはおれが悪いと思ひ直され又其翌日師匠宅へ行かれて腹立たのはわしが誤り堪忍して相變らず稽古して下さいと申されたので師匠もそれがお分りに成たらばと其後は特に熱心に御傳授されたと云御嘶も聞て居ります。且那士としてもめづらしきお方だと思はれます。次に丁度私が攝津大椽師宅へ居て師のお湯くみろのしん切して修業中の事、太夫のお湯くみろのしん切は一口に申せば何でもない様にありますが、其道に於ては随分六ヶ敷又責任の有勤で、譯て私の師匠は吞れる時の湯のかげん又分量なり、其日師匠の聲の吉惡を注意して一々おかみさんへ報告致さねば食事のかげんが有ましたが或時師匠の語り物が合邦内の段三味線は絃阿彌師匠で、丁度「ぐごんなからじや赦してくれとごふと居て悔涙ぞ道理なり」のふし落で蠟のしん切に出ましたが其時中の蠟のしんが横に少し残り夫に火がついてすたゝ落て居るのが師匠の肩衣の蔭にて氣付かず夫故師匠がせつくしられ、夫につれて絃阿彌師匠も三味線が手もつれ、へやへはいつて兩師匠より目から火の

出る程しかられ、他の師匠よりおわびしてもらつた事今に忘れませぬ。其後は絃阿彌師匠より種々お説教聞されました。絃阿彌師匠は極堅いお方で、いつもおれは若い頃から女にまくれた事なし又女からまくれられた事もなかつたから今日迄壯健だと夫れを非常に喜んで居られました。若い頃女が澤山出来たと云てじまん顔でお嘶に成るお方はまゝ有ますが女のほれなかつたのをじまんしられる人も此藝人中間に絃阿彌師匠の外には余りないかと思ひます。能考へればあれ程藝熱心のお方故其時代から女に心を寄る間はなかつたに相違有ません、實に我藝道にとりてはかへすゝもおしきお方でありました。

瀛車の中

竹本文字太夫

故名庭絃阿彌師は小生の師越路太夫とは一日違いで去られました、越路の亡しました時には絃阿彌師は重體でして兩師共しらすゝ泉下にて面會いたされたでしよ。越路は三月十八日絃阿彌師は十九日で小生にはわすれられぬ年月日です。又私が始めて御目にかゝつたのは明治三十二年九月頃です。御靈文樂座には其時前ひらかな盛衰記大序より神崎揚屋まで切荳桑門大内屋敷宮守酒より高野山迄源太勘當の段切染太夫廣作で勤めて居られました、其時に舞

臺のふとん羅紗にて色はうこんで黒の紋ちらし、今に小生の目にのこつて居ります。

師は誠に深切な方にて稽古も深切にして下されました。朝は四時に見臺の前に座して待て居て下され一寸おそいと大目玉です、しかしどちらかと申せば稽古はへたです、こちらが覺へる迄に御本人が先きに腹を立られる故少心には覺へにくう御居ります、しかし何日でもこちらから參れば何時でもして下されます、小生は三日太平記の玉椿の段を深切に何んべんも〱教授願しました、今に覺へ出します。

故攝津師匠を弾かれて初めて名古屋御園座へ御一所に興行に參りました、其時二見夫婦と時の太夫元安田彦次郎様貴田夫婦と廣助師とが一等列車でしたが、外國人が三人程乗つていました、土居様も乗られました。廣助師はこんなきうくつな事はかなわんといふて二等車へ乗られ横になつてア、樂々としたと申て吉彌様(亡吉兵衛)亡七五三太夫様やらと大はしやいでした、其時わたしのかんがへでア、手がるやなあど存じました。

松屋町の師匠

豊澤 猿 太郎

豊澤廣助師、名庭絃阿彌師と云ふよりも松屋町の師匠と呼ぶ方が一番なつかしい感じ

否、恐ろしい位厳しいと云ふ感じ、夫れは吾々のみではない、松屋町の師匠健在の頃文樂出勤の人達はおそらく同感で有ろうと思ふ。

吾々等の未輩のみではなく、一廉の人達でも少しの用捨なく頭ゴナシにヤツ付られて居た。

藝と云ふ物の前には、敵も味方も一切無差別、藝術より外には何物も無い方でした。特に私などは随分呵れた者でした。

焼失前の御靈文樂座の改築されざる眞に淨瑠璃道の大道場たりし頃のあの惣稽古の日の恐ろしい、今考へても身体の引緊まる様な嚴やかな氣分を思ひ起します。夫故に其頃の一座の人達、上下とも大緊張、今のダラケて居る氣分などは比較にならなかつた。

舊文樂の薄暗い塲の中央に師が院本を前に嚴然と座つて、舞台の上の吾々の方をジョリと見られた時などは、眞に冷水三斗の感、

其時分、かなり圖太く横着さには余り人后に落ちぬ私なども松屋町の師匠には顔を見ただでもビクリとした物でした。

松屋町の師匠逝去せられて後、文樂も道場たるの緊張さもなくなり、又道場としての

資格もなくなつたと云ふてもあえて過言でも有るまいと思ひます。

恩師去くなられてより早七ヶ年、今更に、師の尊さを感じ、其偉大さを偲びまいります。

おけいこ

竹 本 末 虎

憶ひ反せば大正元年のころでした、泉町二丁目の師匠さん宅のところへ妾が轉住する事になりました時、呂昇さんが見へまして「廣助師匠さんの處に稽古に來ぬか」と勧められました事から肇まります、申すまでも御座いませぬ、斯界にある以上一度は廣助師匠の御薫陶を得たならば、とは十年も十五年も前からの思ひでした、けれど迎も私らの頭脳では思ひもよらぬ事と諦めつゝあつた折からなのでマア勧めらるゝがまゝに参りましたと思召せ

初め千本櫻の館屋を習ふ事になりました、さて今まで語つて來た語り風其ほかゞ全々違つて居りますので何が何やら薩張り分らぬ様になつて参りました其當時と云ふものは只師匠が恐ろしいと云ふ感念で妾は師匠の顔を見た事はありませんでした、

「怒る時には怒る様に、悲しい時は悲しく、可愛い時は可愛い様に、すごい時は物凄く弾け」とが常の教へ振りでありました、六十路を遠くはね越した今「ハ、アなる程こゝだつたのじやなア」と師匠さんの事を憶ひ浮べて悟り得る處も出来た様な次第です。然し奥の方に至つて「鹿の鳴聲」どうしても出来ないのです、鹿の鳴聲を弾けると云はれまされども、鹿がどんな聲で鳴くのやら、其音を出すのは勿論の事分りませんので頓と困り果てました眞は今でも分りません。

師匠さんは藝には狂人です、宛で狂人のようになつて教へて下さります。熱心に親切に叮嚀に……「ソレそんな無理な聲を出すものではない、淨瑠璃を語るから不可ない、淨瑠璃と云ふものゝ内語ると云ふ處は二ツか三ツしかあるものではない、語ろうとするから根底から間違つて居るのである、斯麼風に語れと自ら示される、それは〳〵親切なものです。それから一等困りました處は淨瑠璃は「道樂に語れ」此れが又分らないのです「どうらく」に語る……つぶやき乍ら言はれるのには南部太夫さへ分らないもののお前だつて分らう筈はない、と當の南部さん御自身も「私も分りません」と云つて居られた様です。

此當時の妾は夢現の様になつて居たものだらうと思つて居ます、寢床にあつてもいつも師匠の前でお稽古をして居る様な感じがして深夜大きい聲を出した事は何度か分りますまいが、それが終夜つゞけられるのです、自身に大きい聲を出した事を悟つたかと思ふと又フラフラと寝込みます、こんな事が長い間續いた結果、一日十五日の定休日さへも忘れて何氣なしに出掛けて見ると連中さんが来てない、今日は静かじやなアと考へて見る時、定休日なる事が悟られた、其時は師匠のお姿が見へた時であつた。「お前何しに來たのか」と、むじ〳〵して何とか誤魔化して歸らうとすると、嚴然とされて「サア來なさい稽古して上げよう」と定休日にも不拘何日もの通り親切にお稽古をして下さります、アノ南の火事の折でした矢張りばんやりと參りますと「今日は何や大阪は半分焼けてるのに」と叱られはしましたが前同様でした、斯ふ云ふ風に問ぬるい妾が叱られ乍らこわい〳〵と思ひつゝもお稽古には欠がさないで參つて居りましたからでしょう妾が四五日も不參すると有難くも使が來て呼びにやつて下さりますのです、稽古で叱られて居る聲を聞いてハア、末虎さんが來て居るナアと云ふた風に近所の方まで知れて居ました當時で良く弾ける三味のお方々からも「あなたはよくあの八ヶ間敷い師匠の處に御辛棒

しなさる、自分共だつたら病氣になつてしましますよ」と聞かされました事は度々でした、常に「何でら分らない事があれば御尋ねなさい」と云つて居られましたけれど、こちらが尋ねる丈けの力がなく其尋ね方さへ分らず、只こわい／＼一方でした、嚴格にして熱誠な事は延びて親切より丁寧となつて來て教へて下さります、其熱心と親切振りは其實際を味はつた人でなければ分りますまいと思はれます、前申上げました通りに叱られ／＼こわ／＼乍らに十年近くもお稽古に參りましたが只藝のみでなく何事によらず親切にして言ふて下さるのには泣きました事は數知れませんが「お前は年は五十にもなつて居るが私から見るとならば十四五の子供じや子供は分らないが當り前だ、だから稽古をするのには決して耻ではない」と訓戒されて居りました、一生を終るまで御身邊に居つて稽古をして頂きたかつたのです、突然福岡市の方に來て見れば師匠さんに對し自分の思ふ様にならなかつた事や、ならない事は山々です。

モウ逝去られて七年、妾は一日として師匠さんの事を忘れた事はありません、憶ひ起すだに其手違ひが悲しうてなりませんのです、今度新しい文樂座で追福の興行があります由地下の師匠さんも定めて喜ばるゝ事でしょう、其のアノ喜ばるゝお顔が妾今日を

閉ぢれば目の前に浮び出て居らるゝ様です。

追憶に書きたい事は山ほどありますけれど何分筆不調法のものでたつた一言のあらましを述べまして「なにはの俤」の資料にお笑ひ草ともなりましたら幸ひと思ひますが、ろくでもない筆、惜しく茲に止めます。

嚴格な方

豊竹巖太夫

絃阿彌師が逝かれてもう七年になると云ふ事ですが、如何に故人が斯界に貢獻されたかといふやうな事は私が喋々するまでもなく既に大方が御承知の通りでございます。又數多い逸話の幾つかを残された方として、更に亦、當時稀有の名絃手として有名な方でした。生前、私は余り深いお近づきがなかつたので、特種に類するお話は皆無でございますが、藝道の事に就ては迎も厳しい方で、稽古の激烈さも想像以上であつたそうです。そんな有様なのでお弟子は何時も其の辛い事を話しては蔭口を聞いて居たこの事です。今となつてはそれが有難い事に思はれて來て師匠の丹精を嬉しく感じて居ると聞いて居ります。嚴格を過して居たと言はれて居る一面を語るに、適切な材料として只今準家寶

として保存されて居る稽古机が有るそうですが、これは机の前に端座して居て弟子に叱言を言つて居るうちに、持前の短氣が出て來て撥で机を叩くので、机にきづが付く、それが度重なるにつれて段々と深くなつて終に拳が入る位になつて居ることです。それから提灯をつけて樂屋入りをしたといふ頃の文樂座の大序語りが、何よりも辛い事に思つたのが絃阿彌師の樂屋の前を通る事だつたと言ひます。早起の人で暗いうちに樂屋入りをして大序語りの舞台を聴ひて居て、やがて舞台を濟ませて自分の控室の前を通るのを呼止めて、例の通り口を極めて悪い處の叱言を言ふので、大序語りは皆この部屋の前を通る時は薄氷を踏む思ひだつたと言ひますが、舞台の行戻りにはどうしても絃阿彌師の部屋の前を通らなければならぬので、やせる程だつたといふ事です。これほどやかましい人では有つたが、又、非常に弟子を可愛がつた人であつたそうです。私も御指導をうける機會でもあつたらとつく／＼思ふことがございますが、今となつては只故人の俤をしのぶだけです。末筆ながら文樂きつての故實通であつたことを申し添へて置きます。

稽 人

竹本 大隅 太夫

私は松屋町の師匠には非常に可愛がられた者です、夫れ丈に稽古に係ると厳しく人一倍ですが三代目清六縁古の爲そう云ふ關係でした、芝居の役付くと大が其時分は巾斗りですから知らぬ役斗り、夫れを無事に勤めて來たのは此絃阿彌師匠の御恩恵今日迄難有くつて居り舛、凡て巾が多かつた立て巾に成つていざりの錢別の時、私一人稽古に行くどやつて見いと云われ舛たが迎もやれんので聞して下さいと頼んだら一ベン丈聞す明日はやれなんだら稽古せぬと云われ其夜一生懸命本讀して明日出懸けると後ト見送りて初花の一クサリ凡そ一時間爰丈云へたら宜しいあとは三味線と合せ惣稽古に聞いてやること云われ舛たが實に此師匠の恩恵は身にしてみ居り舛、今迄居つて呉れたらと思出して斗り居り舛、老年に成られても朝は必ず四時頃には起床されて、神佛御拜終つて食事、夫れから我々の行迄丸本の調べ、凡て淨瑠璃の三味線の章の調べ實にコンの能い事は大したものでした。

夫れで絃阿彌に成られる時御所櫻五の邯鄲の枕、師匠が手を付られて掛合で勤められま

したがやはり一人丈放れて居り舛た、實に能い音色であの老年になられても藝に色氣の有つた事は未だに忘れられませんが、夫れから改名で東京へ行震災前でした新富座で千本櫻の道行を勤められ舛た、此時私は忠信を勤め鑢様が静でした、夫れを弾れるのに尤も老年ですから少し調子も低いのですから外の三味線は新左衛門様外五六名出て居られ舛た、やはり絃阿彌師の音斗り耳に残つて居り舛、夫れから歸られても藝道に終身されし事は得難い師匠と思ひ舛、夫れは名人團平師も稀人ですが我々は知りませんが、けれども松屋町の御師匠も稀人と云ふ可方です、私は叔父に清六有り芝居の巾稽古に行くゝ松屋町へ行けと云われ夫れから絃阿彌師許へ行くゝとおまへには清六といふ結構な叔父が有るから叔父さんに稽古してもらへと云われ舛から實は叔父の所へ参り舛た所が御師匠様に稽古してもらへと云われて來舛た故どうぞ御願仕舛といふと、そうかそんなら稽古してやろうと夫れから特別に稽古願つた譯ですが之れと云ふもの何一つ出来ませんが芝居の巾は大がい松屋町へ行くゝ方寸が付き夫れから直して頂き舛た、叔父清六云々の時絃阿彌師が大變喜ばれた事をおぼゑて居る次第です、其時は思ひませんが今思ひ當り舛、成程叔父が師匠と奉つた譯が分明した譯です。

まだ／＼たんと有り舛が此頃私も役が二ッでちと風邪の氣味ですから絃阿彌の思出感想此位で赦してもらいませう。

名人としての師の性格

竹 本 源 福 太 夫

私如き若輩が、師に對する評言を、本誌に列筆する事は、何となく恐れ多い様ですが、師の御教導の元に、育くまれた一人として、一寸、記憶の一端を申のべて見ます。

師は非常なる精力家で、又、非常に無じやきな、名人肌の人で有りました。歳、人生の定命を越され、尙壯者をしのぐの意氣は、此れ、唯に、藝術本能に生きられた、ゆえんで有ります。

私らが……時あたかも、文樂座大序のシンとしての光榮に浴した頃、師は、私し等に對して、芝居毎に、ローンタのシン／＼と叱多された物です。

其れより師の元に、教を受ける身と成りまして、一ノ谷の組打を教授されましたが……噫々此の五尺五寸の身長に對する十五貫目の體重は、淺間しや、日を追ふに連れ。マイナス／＼と降下して、ついには、無貫の太夫薄盛となり、したがつて熊谷は、次郎直實

ならぬ、次々直されとなり。玉織姫は、械織姫となる哀れな有り様。平山ならぬ平くも
の様に、平伏して恐れ入り。實に言語に絶する面目無さを深くく味あひました。

斯くして、師が教机の上に座された時は、其の嚴然たる牀度の中に、藝術の神々が集
る如く、門下に、教へを受ける人々の目には、師の有様が、ローマの英雄ウルススの如
く、鐵柱をも打碎かん斗りに、見えました。しかし一旦教机を放れ、門下生と對座され
る時は、子に對する慈父の様に、やさしく話され、共に笑ひ興せられました。

師は眞の藝術家で有つた事は、物質的にむとんちやくな、性格の持主で有られた事も、
意味すると思ひます。中古の時代に、名人と詠はれた人々が、多く物質慾にあこがれら
れなかつたと、風聞して居りますが、其れは時代が、しからしむる所で、此の絃阿彌師
の如きは、明治、大正の複雑なる、生活戰線の槍舞臺に、受難時代に有りて、自若とし
て物質を目下に一瞥して、かえり見ず、ひたすら斯界の向上作興に、八十幾才の頃まで
も其の一身を犠牲に致された事は、只々未來有る斯界の戰線に、肉聲と三絃を持つて立
つ人々の尊敬の的で有らねばならぬと思ひます。

師は常に高尚なる薫を好まれました。モットモ、はゞかり乍、我れくも香よき香水等

を好みますが、其れは師の好みと異なり、其の香水を振りまき、其の香ひによつて、異
性の胸に或る情炎を起せんと、苦心慘憺の決果は哀れ皆水泡に歸するので有ります。

かゝる見にくき情慾の種にまく香水にあらず、師は心の清らかならん事を望み、常に薫
香を愛された人、藝術に生きた人、今にして此の一事を思う時、西洋の有名なる音楽家
ベートベン又は世界に有名なる詩人、哲人、藝術家が薫りゆかしき香料を慕ひ好まれた
事を参照しても、實に師は世界的天才藝術家として、私しは斷言してはゞからないと思
ふので有ります。

噫々惜むべき恩師の、此の年忌に當つて、哀悼の意の萬分の一を示すに過ぎません、師
の靈魂は、永久に生玉の淨曲の神殿深くにおはしまして、……滅び行く斯界の現況に、
さまよひ……尙桃源の夢に酔ひ伏す、我等の頭上に、覺醒の大鐵槌を降し給う事を信じて
うたがはなひので有ります……

噫々絃阿彌師の靈魂よ。安らかに有れど、我が友輩一聲に、祈り奉る事を確信して筆を
止めます。

七回忌に際して

吉 田 榮 三

古人の之歌をかりて

かはるらん月日もしらす歎くまに

哀はつかもすぎにけるかな

名庭絃阿彌師瞑目せられしは昨日の如く覺えしにげにもはや七回忌と承り今更に光陰の早きに驚かれ三月十九日祥月命日の御法會を心より追悼申上ます。

亡師の逸事追憶の爲め『なにわの俤』と題しての記念出版誌御發刊に際し心に浮ぶ事を述べてさして頂きます、扱て私としまして絃阿彌師に對して尤も深い印象を持つて居りますのわ規律の八釜敷かつたのと、藝道に熱心なことゝで、師が恩師より傳統的に藝術に於て性行に於て洗練に洗練を重ねられた結果、忍耐と努力、感激と熱誠に基いて純粹の規範的古典味を具備せられ木訥な律義一遍の堅師匠で藝道に精魂をこめられて居られた立派な藝風の持主であつた事が今も記憶に残つて居ります。

遣子豊澤猿二郎氏よ亡父の御尊名を泥濘に落さすしつかりと抱へて藝道に努力なされん

事を魂の底より祈願致す次第であります。

ゲーテの言葉を若い人々の座右に捧げます

『凡て藝術と云ふものは親子の縁を引いて進んで行くもので大藝術家と云はれる程の人を見ると其人は屹度古人の善い處を取つて居る古人の御蔭で偉くなれたものと云ふ事が知れます、ラファエルのやうな人々でもヒョッコリと出て來られるものではありません古代からそれまで人の爲遂げた中の最上の所を土臺にして進んで來たものです彼等がとてもしそれ迄に古人が築いて呉れた當時代の利益を活用しなかつたならばとても名を成す事など出來なかつたに違ひありません』

亡師七回忌の思出として、大變失禮いたしました。

老人の車夫

豊竹嶋 太夫

故廣助師則絃阿彌翁が稀世の名人であつた事は私から申迄もなく皆様がよく御承知ですから別段取り立てゝは申しませんが攝津大椽師が引退後にも殿りして若手の大序語りを教へる爲に早朝起きられて午前七時頃迄にはモウ文樂座へ來て居られました、私などは殊

に目を掛けて教へられた一人であり叱られた事も度々でありましたが今から思へばそれは實に有り難い事でありました。

同師が文樂座への往復は人力車に乗られました、それも車夫の若いのは使はず、他の人から廢物の如く思はれて居る老人の車夫を憐んでこれに車を挽かせ車上から楽しそうに話しかけて居られました。常に綿服を着てそういう車に乗つて歸られる師を見て他に類の無い奥床しさを感せずには居られませんでした。その位ですから若い者が稽古をして貰ふ時は勿論不圖出逢つた時でも美服などを身に纏ふて居るのを見られたら、それこそ大目玉ですから私も注意して同家へ行く折などは極めて粗服を着て出かけたものでした。稽古の仕方にも比類なき親切さである代りにまた八釜しさも一ト通りではありませんでした。名は御遠慮して置きますが、ある先輩が同師の宅で次に出すものゝ稽古をして居られました。名は非常に八釜しく傍で見ても居るも氣の毒な位な嚴格な教へ方でした。翌日其人が出勤して舞臺稽古をして居られた時は實に驚くべき上出来であつたので私はその後翁の宅へ往きました時その通りを話しましたら喜ばれて彼人も今は大切な人で私でも言ふて上げなければ他には言ふて上げる人も無いから一生懸命に教へたのであると申して居

られました。

同師は眞に藝術に忠實なお人であつた事をつくづく感じ思ひ出の儘を記しました。

惣 稽 古

鶴 澤 清 六

本年は故名庭絃阿彌師匠の七週年に相當致しますに付茲に皆様方の御追憶を寄せられます事は誠に意儀ある結構の次第で御座います、想へば絃阿彌師匠は斯界に於ての統帥でありましたと共に高潔にして正邪二道を正しく導かれましたと申事に依り言盡され

す。
絃阿彌師匠生前文樂座銘々持役は御教授に預り自分等も其恩恵に浴しました一人で御座います、御稽古には實に嚴格にして一度御稽古臺に向へば謹嚴何物もありませんでした當時文樂座初日前の惣稽古には寒暑に不拘必ず舞臺前場席に在りまして大序より御熱心に御教導なされました、故に惣稽古當日は一同尤緊張して舞臺に揚りました。

絃阿彌師匠は終始斯道に盡され偉大なる功績を我淨瑠璃界に残されました事は申すまでもありません、元旦に年頭の御挨拶に参りまして本章本を出され是が整理訂正などなさ

れ居られし一事にても斯道の外何物もなき事を御見受け致します。
今此更正の文樂座に於きまして追善興行を行はると共に偏に御冥福を祈る次第に御座います。誠に不備な文意ながら思出の一端を書き記しました。

寝る 時間

野 澤 勝 市

故絃阿彌師匠には種々御教授に預りました。私の師匠喜左衛門師は神戸に居られること故、芝居の役はいつも絃阿彌師に御世話になりました、良く後進者の爲に御教授下さいました。年始の御禮に伺つた時、元旦早々から机に向はれ本に章を入れて居られるのを見て恐縮致しました。澤山話も御座いますが皆様と重複いたします故私の一笑話をお話し申します。

師匠は何分朝の早いお方にて寒中でも午前六時にはちやんと見臺に座つて居られます、私も大低朝は負けぬつもりで参りましたが或時少しくおくれて七時頃になりましたら「今の人達は一体よく寝るナ」と申されました故「お師匠はん、あんたは何時に寝て何時にお目覺になります」と申たら「夜は七時、朝は四時に起る」と云はれました故「それで

は私よりお師匠はんの方がよつ程よう寝やほりまんナ、私は夜十二時より早く寝た事は無く、そして七時にこちらへ伺へば私の方が寝る時間が少しです」と申ましたら「ハア、勘定するさそうなるナ」と申され大笑ひで御座いました。

只今でも芝居の初役が當りますと御本を借用に参り以前良く御親切に御教授下されし事を思ひだして喜んで居ります。

絃阿彌師の丹精

豊 澤 猿 之 助

私が大坂で絃阿彌師匠に教へをうけて居りました十四五歳の時の事を思ひ出してよく話を致しますが、其頃私は一通りのものは稽古して居りましたので、素養の爲めにといふ事で絃阿彌師匠の處へ通ひましたが、今迄は父松太郎の門弟の處で我儘な稽古斗りして居りましたものですから、絃阿彌師の處では見臺の前へ座ると余り稽古が厳しいので、ビク／＼として居りましたが、其の節よく師匠が申されましたのは、此の辛いと思ふ稽古も十年后になつて始めて考へると解るから、といふ事でした。そして其頃私には逆も過ぎた大物大塔宮の身替音頭や生田源八の崇禪寺馬場の仇討を稽古して頂きましたが、

今日となつては一日毎に絃阿彌師匠の丹精の有難味がつく／＼と思はれて参りました。それにつけても思ひ出されて参りますのは厳格な稽古の様子ですが、存命で有られたら父松太郎とも良い話對手になつたらうし、又、斯界にも力強い存在として多大な貢献をして居られる事と考へられます。

故師匠に就きまして

豊澤鶴助

故師匠の弟子であり親しく其の教へを受けた關係上私も何か申し上げねばならない様な氣が致しますが、さて筆を取りますと萬感交々に到ると云つた様な工合で思ふ事の十分の一も書く事が出来ないのを大變残念に存じます。

勿論名人氣質の故師匠の事故色んな逸話めいた事も澤山御座いましたけれ共そうした事は随分衆知の事でもあり又ごな様か外の方々が詳しくお話になる事と存じますから私は唯だ次の事だけ申述べて失禮させて戴きます。

今更事新しく私が申すまでもなく故師匠は随分嚴格な謹直な又反面に於ては何とも口にし難い博愛的な情の深い人でした。其の嚴格な点になりますと私などは故師匠の痾

癪を一手專賣に引受けていた様なもので絶へずお小言を頂戴していた方なのですが、今にして考へて見ますと今日私が三味線引きとして其の日を無事に送る事が出来るのも皆師匠の此の嚴格な薰陶があつたればこそと朝夕共に師匠の事を思はない日とては御座いけません。然し其の當時は唯だ師匠の顔を見るともう痾癪を起して奴鳴られるのではないかと未だ何とも云はれない先から胸がドキ／＼してなるべく師匠の顔を見ない様にそして出来るなら師匠に見つからない様に蔭の方で小さくなつていたもので御座います、處が或る日、それは多分明治四十三年だつたと記憶して居りますが、文樂の九月興行中の或る一日、師匠は何思つてか突然私一人を月見に連れて堺の丸三と云ふ料亭へ行きまして。月見と云つても酒等飲むのではなく唯一緒に御飯を御馳走になつたのです、食事中は勿論他の場合でも必要以外には師匠は私に口をきません、私も恐縮して沈黙つたまゝ御馳走になりました。そして歸途には難波から師匠は一人で「家まで送つて來なくていい」と云つて辻車に乗つて歸つて行かれました。事柄は甚だ簡單で唯それだけでしたけれ共、其の日の師匠は何時もの激しい、そして嚴格な人としてではなく温情なそして慈父に似た師匠として私の眼に映りました。

私は何時までも遠去かり行く車上の師匠の後姿を見送つて常にない感情的な氣持で一杯で御座いました。今でも此の日の師匠の姿を思ひ浮べて一日として故師匠の冥福を祈らぬ日とは御座いません。

三 味 線 會

鶴 澤 叶

故名庭絃阿彌翁の大家たる事は斯道に従事するものゝ等しく敬慕する處なり恰も今年は七周忌にあたりて師が在りし往年を追想するにある時師に就き娘景清日向島の教へを乞ひし事あり、快諾を得て彈手の教授を受たり、其内マクラ謠ひの前彈の手において數日練習に通ひたるにいつも不可なりとのみにて覺得たりとの詞なく前後十三日間通ひたるに別段委しき説明もなく只一言に不可なりとのみ、茲においてつらく考ふるに小生も既に四十三歳になり斯く小兒扱ひにされては果しなし、尙今日も例の如くなれば師に向ひ一言詰問せんと心裡決する所あり、第十四日目に初めて漸出來たりと申され、しかし今日は如何なる心で彈きたるかと問はれ、未熟なる私迎も満足なるおゆるしを受くること叶はずと決心し三味線の手を彈かず只管日向島恕濤の景色の場面を思ひ彈しに斗ら

ずも師のお耳に留りしと答へしに師の諒されしに總て三味を彈かず心で彈けと教へを受けたり、今日に至りて師の深意のある所を了解するを得たり、其後大正十一年四月八日大阪北區天神小橋永藤氏お座敷に於て三味線會の催しあり、其節師が語り小生の糸にて日向島を演じたる事あり。

翁の年忌にあたり往事を追憶して師恩を厚く感謝する所なり。

文樂再興の年絃阿彌を想ふ

橋 詰 せ み 郎

生れかはつたやうな文樂の初興行に三度も四度も通つて居る姿が猿二郎さんに見付かつて、父絃阿彌の追善をするから何か書けとのお話でしたが、門外漢の私どもが何の材料も持て居ないことは明白です。しかし、太棹界の大立物としての彼の神技を揮つて居られた姿は、攝津大椽の姿と共に髣髴として忘れぬものです。しかも其の追善が新興文樂の最初に擧げられることを、世の人たちとは少し變つた意味から喜ばせて頂きたいと思ひます。

昭和五年といふ年を淨瑠璃の通人たちが喜ばれる言葉には様々のものがありませうが

通人ならぬ私としての喜びは『若人への進出』とでもいひたいやらな幼い氣持の生れかけたことです。それは新文樂の落成を機會にふとしたことから女學校、中學校の學生たちが日曜々々の朝のうちに先生たちに連れられて人形淨瑠璃を見に来るといふ試みの始まつたことで、淨瑠璃の大通からは詰らぬ似真といふに過ぎないでせうが、日本に生れて日本の人形淨瑠璃を見たことも聞いたこともなかつた若人たちの心の奥へ、金線のやうな響きを傳へた反響の深さ大きさを思ふとき、一刻も早く斯界先達の靈前に奉告したいと考へるのは私ばかりでないかも知れません。妙な傳統も知らねば因習にも煩はされない若人の純な藝術心のなかへ、清らかに流れこんで行く淨瑠璃音樂の絃調と節奏とが他の音樂と共に宇宙に磅礴する幾年後の世界を考へますと、絃阿彌たちの日本音樂史上に再生する日の遠からぬを想はれます。

で、故人絃阿彌を追懷すると共に、遺兒猿二郎君に對して新らしい奮起を望むのも、故人の英靈に對する禮であるかとも思ひます。

残念なことは此の若人たちに聞かせる三絃の名手のなかに、今も居られぬ年ではなかつた絃阿彌のやうな大名人が消れて居ることです。或る女學校の先生を無理に連れて行

つて大様の淨瑠璃を絃阿彌の糸で聞かせて、其日から好き者にならせた事などと思ひ出すと、ちやうど今年のやうな折からに一倍慕はしさが慕ります。

思ひ出づるまゝを

豊竹 呂太夫

私が絃阿彌師生前の逸話として見聞した事は實際筆紙に盡せぬ位ですが、就中師の廣作時代に彦六座で組太夫の忠臣藏六ッ目を弾かれた時「聞くに驚き兩人刀おつ取つて」テシと三味線の合を清水町の團平師が聞いて居られて、ア、コレ／＼そのテンでは跡が出られぬ、自宅へ來いと廣作師を連れ歸りテンの一撥を五六十度も繰返し／＼弾かされた道の廣作師も閉口して私も最早五十の坂を越しながら今更の修業でもありませんと云へば、團平師がイヤ／＼何を云ひなさる藝人には年はないお前様も是からじや今迄は唯の三味線弾きじやと云われ大いに悟る處あり、爾後一意専心斯道に精進して遂に二見さんを弾くやうになつたと時々私に咄された事があります。師は一心萬功とでも申しませうか身を持する謹嚴朝は如何なる極寒の日でも午前四時頃には起床、五時から弟子共の稽古をつけ、七時前から文樂座へ出勤、大序及び序中の修業中の者を督勵して、二段目頃

に歸宅、御連中の稽古の傍ら机に向つて本書き、朱章入、黒朱迄も丹念に入れられた。斯道の虎の巻と稱すべき書冊の段数は三百段に近い、此遺された一大偉績は今後幾十年を経るとも朽ちざる羅針として後學の者を益する事と信じます。私が師の藝妙の一に數ふべきと思ふのは、師に布引三段目を稽古して貰ひました時、音靜まれば葵御前のアノ枕文句、師匠の三味線だと樂に一息に云へて末だ息が餘る位なのに、他の者に彈かすと術なくて仕樣がない、實に不思議でした、いつか二見の師匠が廣助は顔の器量は悪いが世帯持ちのよい女房じやと申された事があります、成程絃阿彌師の至藝は太夫の息が樂に語れたのでせう、二見の師匠も廣助師と舞臺に出られてからは余り病氣欠勤をされなかつた様に思ひます。

まだ／＼面白いお話もありますがホンノ九牛の一毛を拙き筆にて書認めました。

名人絃阿彌翁を憶ふ

渡邊虹衣

名人にておはせし名庭絃阿彌氏の七回忌に何か書けと云はれしも、逸事逸話は先輩諸氏が擧つて執筆さるゝならんと思ひ、拙き川柳句をものして供への花に代へる事とな

しぬ。

○ 絃阿彌の絃に太夫も木偶も生き

○ 三味線を持つと毛ほどの隙もなく

○ その絃がなくて文樂物足らず

紳士紳商も眼中にない

岡田翠雨

紳士天狗の中でも渡邊庄助(文洲)谷新助(文泉)などの人々は古老株で、多年敲き込んでゐらるゝ丈けに、手堅い語り口であつた。どちらも難聲であつたが、殊に文洲さんは念の入つた難聲であつた。呂律も明晰でないから、口捌きがわるかつた。本人も言ひたいことをハッキリ言得ないのが残念だといつてゐられた。

文洲さんは紳士天狗の總帥高木蟻洞さんと共に五代目松葉屋廣助に學び、五代目歿後

松屋町の師匠(絃阿彌)に師事したのであつたが、松屋町は藝にかけては五代目よりもやかましかつた、これには文洲さんも瘦せるほど苦しまれたらしい。文洲さんは熱心にかけては人に譲らないが、器用な人ではなかつた。おまけに口捌きがわるいものだから、一層稽古に骨が折れる。それで師匠も骨が折れる。

私も二三度松屋町のお宅へいつて、その稽古振りを拜見したが、師匠も火のやうになつてやつてゐた。野口茂平君(立志堂藥舗)の如き紳士すら師匠の前に座ると、虫ケラ同様にあつかわれ、平蜘蛛のやうになつて、鼻息を窺ふもの如くであつた。

文洲さん、私に語つて曰く「松屋町の師匠は熱心に教へてくれるので、有難いことは有難いが、餘り稽古が烈しいので、時によつては恐ろしい様な時がある。けれども茲が辛抱どころ、虎穴に入らざれば虎子を獲ず、耻を忍ばねば事は成らぬと氣を勵ましては行くのだが、夫れでも餘り叱られるとイヤになつて、門口まで行きながら引返して戻つたこともある。又戻らうとして思ひ直して這入つたこともある。又或時は門口に立止つて小首をひねり、今日は留守であればよいがと思つたこともある。その位辛ひ想ひをする位なら、止めて仕舞へばよいのだが、そこが夫れ好きな道、因果と思ひ切られぬので

す。そして又それほど恐ろしい師匠であるが、そこに又いふにいはれぬ真情の籠つてゐるのが分るので、親切がなければいへない言だといふ手答へがするのです。夫婦中がよすぎて争ひが絶へぬのと同じ事です。それなればこそ今日まで多年稽古に通つてゐるのです」と真面目な人丈けに言葉に力を籠めて話された。私は嚮きに野口君の叱られてゐるのを目撃してゐる丈に、此の文洲さんの話しには、掛直もなければ飾りもないのがあり／＼と判つた。

松屋町の師匠は評判のやかましやであつた。松屋町の師匠といふよりはやかまし屋の師匠といふ方が適當であつたかも知れない。それほど師匠は藝にかけては熱心であつた鬼神を欺むく威力があつた。

私は二見の師匠(攝津大椽)の許でしば／＼出遭ひ、會食をしながら藝談に耽つたことも多かつたが、藝談にかけては一步も主張をまげない其代り、それ以外では眞に如法の好々爺、淡懷水の如く、竹を割つた様な氣質であつた。

恩師の思ひ出

鶴澤淺造

絶大の御恩を蒙つた私には書きたい事は澤山有り升が其中御稽古の時でこわかつた中でおかしかつた時の事を申しませふ。御稽古になられると、とてもこわい御師匠でした、ある日竹本相生太夫氏と共に忠臣藏五ツ目の口を御稽古願可參上いたせし所誠に御氣嫌宜く見台の前へ座るや「サおいで、ヤロ、ソレ幕が明くでヤチョン／＼／＼チョン、サ幕があいた、弾いてみ」そこで私が三重を弾出す可ぐテン／＼／＼と三ツ四ツ弾出すや「コレソリヤ何を弾くのや、お前は何日も云ふてやるのにまだバチがそろわんがなア、ア、なんざやなア」と一べんに御氣嫌變り、それより終りまで散々に御目玉頂戴致しながらやふ／＼すみしました、御稽古がすんだら今迄の御氣嫌のわるかつかはどこへやら又もどのよい御老人に成て居られました。

書翰

豊澤雷助

殘寒未だ嚴敷御座候處御尊君様始め御一統様益々御清榮奉賀候次に小生儀も無事にて暮

居候間乍憚御休神可被下候陳者其後は大いに御不沙汰致居候扱て先達て御書面にて最早亡師の七回忌に御座候由夫れに付來る三月には文樂座にて追善興行被成候との事大いに結構な事に御座候其節紀念として履歷の事を御出しに相成るとの事小生儀に於ては卅六七年前より東京に住居致居候事故亡師の事を何を書てよいやら悪いやら一寸判り兼何分共に文學の不生故其所はかんべん被成度候何分共に先輩の御方様より澤山出してもらひ被成度候此事は不惡右様の事故御赦し被下度候外の事にて間に合ふ事なら何成共致し候先ずは乍延引御返事迄早々

おしかり

豊竹喜昇

拜復余寒烈しき折柄日頃は御無沙汰に打過ぎ誠に申譯もなく存じ居り候處御障りもなく候由御悦び申上ます。却說月日の經つは早きものにて故絃阿彌御師匠御他界より本年は七週年になり實に夢の様に思はれます、妾故御師匠様に師事し御稽古をして頂きし當時の思ひ出を御話し申せば盡せぬ事でありませぬが取り分け藝術に熱心嚴格にして一生斯術に捧げられし点は藝術の神様と仰ぐべき方だと思ひます、妾は十八才の時より入門し

て御稽古を御願ひ致しましたが、三味線のお稽古で始めの程はテンと弾いてもいかぬツンと弾いてもいかぬテンツンを幾度繰り返し弾いても唯いかぬと叱り飛ばされ遂に横を向ひて知らぬ顔の半兵衛を極め込まれ如何にしてよいか途方に暮れ泣きの涙で歸りし事も度々ありました。丁度伏見の里の稽古の時どうしても會得の出来ぬ所があり非常に御叱りを受け明日から来るなど言ひ渡され御詫びをしては参り又叱られ、怖ろしくて御宅の門迄行つて這り兼ねる事は度々ありましたが其れでも御叱り下さるは有難き事と思ひ返しては一心になつて御稽古をして頂きました。又朝の早き事は驚く斗りにて、當時は電車もなく毎朝五時に道頓堀相生橋の妾の家を出て松屋町の御宅へ参りましたが、まだ寢所に御出での事と思ふて参りますと御師匠様は早や朝の神々へ御禮拜なされてるか既に嚴然と稽古場に御座りになり居りコレ今頃出て來て何の修業になると何時も御叱りを受ける斗りでした。其後或日御師匠様が御前の様な辛抱強ひものは無い、此れ迄幾人も女子を稽古してやつたが一人も一ヶ月と續いて通ふたものはない、お前は辛抱して來たかいが見へて來たと云ふて頂いた時には妾は天にも登る思ひで飛び立つ斗りに嬉し涙を流し感激しましたが今にして思ひ出せば故師匠の前に出づれば襟をたゞすと云ふ嚴

格でありましたる故門弟一同眞面目に一生懸命に御稽古を勵み今日あるを得ましたるは單に先師の御蔭と感謝して居る次第であります。誠につまらぬ事を永々と申し上げたま此れも故御師匠様を追慕の余りと御許しを願ひます。

一言一句

竹本源路太夫

私も恩師絃阿彌様の恩恵に浴しました一人ですが、今回の追善に當りまして有りし日の數々ある中の思出を一つ逸話として一筆申上ます。恩師は斯導上に置かれましては嚴格其物を越された感が有りました、それは一度故師の御前に教へを受られた人々の様に感しられた事でしょー、私等は唯恐い御師匠と思つて居りました、御稽古の時間は朝未明より開始されます、私はすばらして時間もおくれ勝ちでした、其度びに恐ひ御師匠の顔になやまされていつもくぼろくそに云われて居りました、或る時でした一月中旬未明より芝居の狂言のけいこに参りその日わ非常に寒い朝でした、冬の朝は中々明けませんが入口に立つて居りますと約一時間の後御自身に戸を開けに來られて、オ、エライ寒いのに中々早いなあと云われた時は實にうれしくさむさもわすれました、其日は何時にな

く上氣げんで御教導に預りました、今思へばボロクソに言はれた一言一句が今では實に優しい温情のお詞で敬慕の念が一増深く回想する時は本當に有難い恩師で義よりも何よりも藝術の爲に生られた我々の神様です、永久に腦裏に深厚にキザミこまれて居ります。

私が會ふた絃阿彌さん

食 満 南 北

何かの節附の爲、私は絃阿彌さんに會ふたのは可なり晩年の事でした。

私はあの高齢な絃阿彌さんが、丁度其時來てゐた素人のお弟子さんに稽古をつけてゐられる處へ行あはしたのです。私は實際非常な熱で稽古をしてゐられる姿をしみじみと見てこれだと思つたのです。

お家は非常に船場式な、ちよつと閑い居間で、しかも其處に藝人と云つた風の黴しもないと云ふ事も嬉しい一つでした。

私は私の用事に移つた時、又師の熱心さに動かされてしまつたのです、

『さう〜』

と何でも一口にかたづけてしまふ私も師の非常な熱心さにスツカリ化せられてしまつ

て、大分永い時間をお邪魔してしまつたのです。

其うちに要領を掴で行く事も亦ちよつと珍らしい位の人でした。

私は老人と云ふものに本當は話の合はない人なのですが、不思議に師は其時から懐かしいやうな心持になつて、それ以來、師に會ふやうな機會の來る日ばかりまつてゐたのです。

これは今このやうな記念の本が出されるから、そんな風に云ふといふのではない、心からさう思つたから、さう描いたまでである。

書 翰

竹 本 相 模 太 夫

拜啓其后は御無沙汰何とも申譯御座りません、益々御健勝に被遊誠に嬉しく存じます。今回は態々と御書面被下誠に難有御禮申上ます、御師匠様の御七回忌についてのいろいろの御心盡被下厚く御禮申上ます。御承知之通り私は一方ならぬ御教訓を御願申した事故毎朝御師匠様を御拜します、又毎月拾九日には何か御生前に御好みの品を御供へいたし御参りいたして居ります。御申越の儀に付きましては私は片時も忘れる事の出來ませ

ぬと云ふことは、御師匠様が御庭を御歩きながら、たれに御咄しになるでなく「三味線は實に六ヶしい」と嘆聲を一人ごとにおつしやりました時は私のむねがぐつとつまりました、これ程の御名人大家となられましても壹歩もゆるめずに御研究被遊ますに、ちがいなと思ひましたら思はずほろりと涙が落しました、その時の御事は今に片時も忘れいたしません。

誠に恐入りますが私には文章もうまくつゞけません故右申上した次第を宜しく御訂正下さる様御願申上ます、御承知の通り思ふことの半分も書けませぬ不調法もの不惡御承下さいませ、いろ／＼御用件有りましたら何卒御用命下さいませ。右宜敷御願申上ます時節柄何卒御身御大切に御願申上ます。頓首

忘れえぬ思ひ出

豊竹 和泉 太夫

私が師匠に初めて御會ひしたのは明治四十一年のときでその年の一月も半ばすぎたひどく冷えびえする日でした。文樂の出し物は「祇園祭禮信長記」で全師は攝津大椽を爪先の段で弾いておられました。自信と決斷と決辭とがあの特徴のある眉のあたりに漂ふて

いる師匠の風采に接したとき偉大なすべての藝術家の特異相を聯想してなんとなく頭の下るのを覺えました。それ以後色々と師匠に御世話になりましたが、その中にも大正十一年九月十五日初日、前狂言は「生寫朝顔日記」中は「箱根靈驗記」で津太夫師が阿彌陀寺の段、今の大隅さんが饞別の段、私が天神堤を竹澤團六さんの三味線で相勤めしましたときには殊に御世話になりました。何分にも「つくな」は大變むつかしい語物なので三日間は緊張して聞かせて戴かうと思ひ松屋町の全師の御宅へ登りました、扨て聞かせて戴くことは聞かせて戴きました、あまり全師匠の妙音に全く聞き惚れてしまひまして自分の教へて戴いていることをすっかり忘れ、この貴重な三日間は濟んでしまひました、が愈々四日目は口を上げねばなりません、どうして／＼口を上げるどころか、もちもさげもありません、全師から散々御叱責をうけて倉皇として歸宅いたしました、歸宅後デット熟考いたしまして結局自分の修業不足を痛切に感じ叶はぬ時の神だのみといふ様な譯で生玉神社に參詣いたしました、そしてその歸路材木町の愛願先塚本さんの御宅へ立寄りました——皆様も御存知でしょうが全家と師匠の御宅とは丁度脊合せになつていたのでした——そこで色々世間話を致しておりますと丁度夕食後の散

歩で、もあつたのでせう師匠がこの家へ御立寄りになりました、で、塚本さんと私と色々師匠から藝道の話を承りました。話しが進んで「つくな」のことになりましたので私はそれが大變むつかしくて困りますと申しますと、師匠は笑ひながら「そりやむつかしいよ、この「つくな」は昔わしが天満の方で「名人十三」といふ人のを弾いたことがあつたがよく語つたのはこの人位だらう、お前がむつかしがるのも尤もだ、では晩にもう一遍來い教へてやらう」といはれました。將に神の御利があつたのです、その時は實に喜しかつたものです、で早速その晩參上して親切に教はりました。

御老体にもかゝはらず藝道のため後進のため、この様に熱心に教へて下さる師匠の御心に鞭うたれて私も懸命にやりました、そしてこの大役を無事に勤め終りましたやうな譯です、私は今でもあの時の御親切を思ひ出していつも感謝いたしております。師匠の計を文樂の部屋で聞いたときには斯界のため心から悲しみますと全時に將來師匠のあの熱心を以て藝道に精進することを心強くちかひました。

若手から見た絃阿彌師匠

竹本 陸路 太夫

故師匠の偲び草はいろいろの人から書かれるので重複と思ひ私は今日文樂座の下級座員と故師匠在世當時の若手下級座員の狀況を師匠中心に語つて見るが尤も追善の意味あるものと思ひます。故師匠は極めて古典的な嚴格な人でした、私等の相想ではあの人が斯界最後の古風な人と申しても憚らない、師が若手を非常に教訓せられたのは其の當時は一方からその教授法が時代遅れと反對するものもありましたが今日と對照して若手としては實に得難い人、今居てほしいと痛慚に堪へません。師匠が死なれ御靈文樂も焼失し其の後は特に一新し今回新築文樂座に至り丁度過渡期時代に入つたやうに思われます故師の當時は下級者が組見でもするならゑらい反對で、組見も頼みまわり御禮廻りの辨茶羅いふその暇に勉強せよとてそんなのはコキ下ろされました、師は毎日／＼早くから樂屋へきて鞭撻されたので其頃は勉強の仕甲斐がありました。故師匠はまた淡泊な人なりし故一面から見ると甲の太夫が非常に氣に入ると乙の太夫が氣に入らず、甲が氣に入らぬやうになると丙が氣に入り、よく氣が替る所が短所の如く思われたが、それが自然

と優勝劣敗の選擇の一法ともなり長所とも成る様な事が多々ありました。大序から相當の級の人に至るまでがみ／＼と出來不出來といひ其の頃の惣稽古（初日の前日人形入りの）等は戒嚴令むしろ一同は戰時氣分でした、故師匠の面影を回顧すると深々として盡きず、今日の文樂は時代の要求か？修業とか稽古勉強とかは出來ないやうな工合になつてきて痛切に松屋町（故師匠）が居られたらと追憶と思慕の念に堪へません。未來は若手のものといへど今日の如く一人二人の若手が進級しても明日の時代に孤軍奮闘……の如ま狀勢に立至るやも計り難く思惟せらる、紋下の外に紋下を壓倒する程の太夫が五人六人出來て初めて淨曲は興隆するものと思ひます。今回故絃阿彌師匠の追善が營まれるのは實に結構の至り、然して此機會にせめて若手の爲の第二の松屋町が出來るやうにしてほしいものと思ひます、其の意味から私は下級若手連の箇々片言要求を述でると共に絶大なる追福の意を表します。

連中の會

竹 本 角 太 夫

拜啓早速御返事差出筈小生不在にて延引仕りました、此度わ亡師の御追善なさる由御殊

勝の到に存じます、小生として亡師には稻荷彦六の時分には誠に引立てもらいました。御連中の會には必ず先代大嶋太夫氏と後を語りによばれ濟んでからわ連中さんの前で語り口をばろくそにいわれました。が今になつてそれが一口一口ために成る事ばかりでよい參考といつも喜こんで居舛、先は思い出すまゝを。

入門當時

豐 澤 廣 太 郎

十三歳の時入門、當時三代目廣作と云ふ始めて太功記夕顔棚を稽古受チリチ、テンが引けずチリスコテンと名付けらる、其當時富田屋橋南詰南へ入東側に仙昇事後四代目廣作師と新町の新左衛門師宅へ御稽古頼み下され早朝より稽古受に參り歸宅が二時頃に相成り師宅へ歸れば何故今頃迄歸らぬかと立腹致され時分時に御飯食べぬと身に害あり明日よりは早く起て稽古致すべし其れ共朝起が出來ずば時分時には御飯を食させて歸へすよう、朝起は我身の藥なりと事傳を致されました、其明る日よりは兩師の内何れかにて御飯を頂く事になり半月程經て稽古より歸りますと師匠が此頃は晝飯は如何致し居ると聞かれます故稽古に參りよばれて戻りますと申すと何故に左様な事を致す先方は挨拶に云

ふて下さるのに毎日食べ歸るとは不埒なやつと大目玉は此方へ頂戴致しました是れも思ひ出の一つに成りました。

名庭絃阿彌と改名の時より少々病氣では有りましたが押して出座致されました、其後全快致され東京行午前九時の特急で出立致されし所先發の貨物列車が彦根邊で脱線顛覆致した時は留守宅にて心配致しました、幸に師匠の列車は直ぐ次の列車にて能登川より一ト先づ京都新左衛門師宅迄引返されし電話架子し時は嬉し涙がこぼれました、早速京都へ参り拜顔致し胸なでをろした次第であります、其翌朝東京へ向はれ大入満員にて首尾よく勤められ歸阪、時大正十二年七月。次は京都南座も好都合大入満員にて目出度打上歸阪致され次が岐阜名古屋此時は私しの胸に當りし事が氣に成つて仕様がありませんでした、其れは行先が美濃の國と尾張の國です故、御幣かつぎのようなれど老体故少し暖く成て御出に成てはと申すと何寒さはこたへぬと申されますし一度思ひ立たれた事は後へ引かぬ方故御伴して参りました、道中何事もなく岐阜も目出度打上げ名古屋へ乗込師匠宿上長者町の私宅に居て頂く事に致し初日も目出度濟み中か日頃には三代目越路師も師匠絃阿彌を尋下され種々藝道の咄し又昔がたりを致された末、御たがいには身体大事に

せらるゝようと越路師は絃阿彌師を絃阿彌師は越路師をいと睦まじくいたわり合別かれられしが御二人の別れでした。

名古屋打上げ十二月下旬歸阪港町驛下車步行中師匠の時計が帶の間より下がりしを驛員が注意致して呉れました師匠は早速直すのと老体と神経痛の足元にて思はず前にのめり伏顔面鼻の邊りに傷を負われ其時ハット思ひますが両手に荷物を持ち如何とも致し兼早速起しに参りました所大した事ないと申されました、常々より手を引かれる事、身体を持つて貰ふ事をきらいな氣性はれも運命のなす所。其年もすぎ大正十三年一月三日能勢妙見様へ代参、参詣の山道にて下駄の前ばが抜け下山道で花緒は切れ御水の瓶の紐が切れ瓶が破れ不吉此上なし、何事も無き様と毎日御祈致せし所一月十八日より病床に付、三月十九日越路のあとを追われました。

線香のかほり

豊 竹 右 昇

光蔭矢の如しとやら申します御師匠のお亡くなられてモウ七年になりますそうです、決して忘れたと云ふ意味ではないのです、今でも六ツヶ敷いと思ふ点があります時はい

つもくお師匠さまの事を想ひ出します、大正元年で御ざいました妾は第一番に日蓮記を教へて頂きました、その時は左ほごまでも感じぬ様でした、それは大体妾がどんな性質からではありませんが、さて其次ぎが紙治でありました、その時の文讀みになりましては一ツ時に六ツケ數くなつた様な感じが致しまして天井でも落ちたかのようにグツともスツとも出ない事になりました。あの厳格な性質のお方でありましたので朝七時にでも参りましょうものなら一喝の下に「今日は休みや」と叱られます、三十分も遅いと自身に感じましたら門口を這入る事が出来ないで、もぢくして居て連中から見付かりまして泣顔下げて引きづらるゝ様にしてこわく乍ら内に這入つた事は幾回かは知れませんがそれでも一旦お稽古となると極く親切に教へて下さります「御殿」を習います時「かゝ様飯はまだかいの」逆も叱られました「御飯のひもじい時無邪氣な子供がそんな言を云ひますかいな、よく物を考へて見なはれ、何でもその通りや」それが今も耳の底に残つて居ります、男の方の太夫さんが見台の前で語つて居られますと五行本をポンと向ふへ突き落されて居られた事、其時某太夫さんは匍ふ様にしてお辭儀をして歸らるゝ事や、稽古中に少し氣に入らぬ語り方をして居るとクルリと横の方へ向き直つて何か書いて居

られました、それが今日の前にちらくとする様でございます。何時も五時には御飯をすまされてキッチンと机の前に座はつて居られます、そうしてあの結構な線香の薫り……それはく厳正なものでありました、如何にだらしない妾でもどこかにお師匠様の御教への跡が残つて居りまして語るにも教へるにもそれが自然と出るようであります。若い時の仕込みと云ふものは恐ろしい物と何時もくお師匠様の事が想ひ出されます。其の當時人様は「あの八釜敷し師匠」とか何とか云つて居られましたがサア稽古と云ふ事になりますと親身懇ろに手に箸を取らする様にして教へて下さいます、其のお顔とお妾が今も目をつぶして見ると、それ今其眼の先に居らるゝ様です、書きたい事も山々澤山にありますけれど他行中の事で此のお見立てを見ましたので取りあへず一筆だけを書かせ頂いた次第で御座います。

俳句

絃阿彌翁七周忌に

高原慶三

春寒くされたる絃の余韻哉

香煙のゆくえをひけり春の夢

師の寛大

鶴澤綱右衛門

遣子豊澤猿二郎君が父の七回忌に當り「なにはの俵」を出版せられるに付若輩乍故絃阿彌師と御靈文樂座で有りし思出を申ます、廣助師と申すより松屋町師匠で通つて居られました、その通名がどれだけの方で有つたか私が申迄も無く皆々御存じの事と思います故攝津大椽、故廣助両師が三十三間堂柳を相勤られし節皆々御簾の中で聞いて居りましたが大落しの處でどうした筈みか御簾のまん中の長い切れが落てぶら下りました、その瞬間、三味線の撥を突込まれて破れました、皆々大さわぎでした折り悪しく私がまん中に座して居りました故落した事に成りました、何分雷親父で通つてゐる人ですから私に首やと申し、皆わい／＼云ふて居りました、落したおぼろ有りませぬがさいなんと思ひ首をかくご致して居りました、役をすまされ不きげんで樂屋へ入られました故早々御詫致しますればい／＼大事ない／＼この一ト言で皆々あつけに取られました、その後去る人に御簾の切れを落した方を聞きました、名は申ません。或る時座談の折御簾の話が出ました時わしがそこゑ氣を取られたが悪いのじやお前方もけつして舞臺で他に心を引かれ

ぬようによく氣をつけなされと申されし事がありました。攝津大椽引退なされし後毎朝早々より文樂座に出張なされて、にがい／＼顔を見せて居りましたが時折にはうだ口をよく申されました、又若輩者斗りよせてはり切の番附を造り御自身が審判致され賞を出されし事も有りました。私／＼の役をつけていた／＼よふに成ても給金その頃は（ちり）と申居りました、何ヶ月たつてもいた／＼けません、他の人で役の悪いのにちりをいた／＼いてゐる方が有ります故去る方に問合せました、その事が松屋町の耳に入り早々呼出され金をいた／＼より役のよいのをなせよろこばぬ金の事を云ふよふでは藝は上達せぬときつく叱れました、その後ちりをもうたかとおたづねに成りし故こわ／＼まだですと答へますれば、それはいかんと仰せられ、しばらく立つていた／＼ける様になつた事が有りました。友人鶴澤友若が病氣中松屋町の師匠が私に友若の内へわしの車にのりよふだいはいかゞと聞いてやれとの事、人事ならすうれしく／＼早々見舞にいた事が有りました。なつかしき故人の生前のお話を亂筆にて。

御 見 舞

貴 田 た ま

時日ははつきり覚えませぬが、たしか大正十年の事。宅の主人（五代目越路）が、あの永い間の病氣中、自宅で療養して居りました時、廣助様が神經痛で足のお悪いのに、わざ／＼見舞に來て下さいました。主人も非常に喜びまして、病苦も忘れ藝道の事などお話し致して居りました。又廣助様も、藝の事に成と無中に成て話して居られましたが、やがて、お歸りがけに宅の主人にくれ／＼も、今あんたは責任の重い大事な體や、私し等はモウ八十からにも成て何も役た／＼へんが、あんたは是からや。あんばい養生して早く芝居へ出て貰わにや／＼ならんぞ、幾度も／＼おつしやて、お立に成ました。主人も老人のお身を案じ、玄關まで送つて出まして種々御禮を述べ、尙丈夫な様でもお年がお年故、無理をなさらぬ様に何でも長生して貰ふて、まだ／＼芝居の爲に盡して貰わにや／＼ならんぞ、両方から同じ様な事を云ながら別れをつけて居られました。其時庭の程まで出られた廣助様が、どうしたはづみか、ころりと、ころばれました。それと見た主人は、私や女中を突退け矢にはに素足で飛で下り、抱起しました。幸いお怪我も有ませ

んでしたから其まゝ待してあつたお車におのせ申しましたが、廣助様が、見舞に來た病人に介抱して貰ふなら、ごつちがごつちや分らへんと笑ふてお歸りに成ました。其お方と主人が年も同じ月も同じ、たつた一日違ひでなくなられ、此度も又御一しよに追善興行をして貰うと云事は、よく／＼因縁の深い事と思はれます。いつも主人の話しが出るゝ直ぐに廣助様の事が思はれ又廣助様のお噂をすると自然と主人の事が浮みます。是は私の忘れられぬ一ツのお話しとして此度の本にのせて貰ふたら結構な事に存じます。

父の七回忌に際して

豊 澤 猿 二 郎

父の老後に侍し、今日文樂座の彌生興行に父の七回忌追善興行として、「空也上人」の三味線の末班を汚し、この「名庭の俤」を、父を追遠の意において、皆様の高文を頂戴して立派に父の回忌を営みますについて、御最負の皆様の御餘光を、身にいたゞくにつきまして、私はそぞろに父在ぞかりし昔が偲ばれて、「空也上人」の三味線を持つ間も、涙なくしてゐられません。

皆様方の父の俤をそれ／＼に拜しましては、在りし俤が、私の眼に映る。そしてそれ

は盡く私のためには痛恨の限りを盡します。

父在世し日の想出は、胸を衝いて浪の如くに打寄せますが、只今は何も申せません。只一つ私の懺悔であり、且つ一代を藝人の浮華を知らずに送つた父の逸事を述べて、私自身としては、父への追福の手向であり、皆様には私の懺悔として聽いて頂きたい。

父は一生絹物を着なかつた人です。ゴッ／＼の木綿物で、猿二郎の昔から八十三歳の名庭絃阿彌の名を近衛家から下しおかれましたまで、押通した人でした。これでその日常の一端が萬事を示してゐます。

ところで、父は藝人の華美を箴しむる意味において、弟子でも同輩でもが、絹物を着てゐると「これは何といふ着物や、いゝ着物だな〜」と眼を近け、袖口を掴んで眺めいるといふのが癖でした。弟子どもに警告をよべることも申しませうか、父のこの「いゝ着物やな」を喰つた人々は座に堪へなかつたのです。

一日文樂座の三階に父が、何かと登つて來ました。柱にかゝつてゐた、素破らしい二重マント、襟は當時流行の尖端を切つてゐた最新の流行の露國産の羊の胸毛の渦をまいた漆黒の艶々しいのが付いてゐます。――父は例の如く「えゝマントやな」と手にとり

ながら周囲の人々の顔を眺めてゐましたが、再び「えゝマントやなごなたのや」といひました。――三階の一人が、こゝぞとばかり「お師匠はん、息子はんのだすがな」といつた。――この一語は父の胸にどう響いてたでしやうか。この話を後に聽いた私は穴へでも這入りたかつた。今でも冷汗が出ます。父はそれつきり、「えゝ着物やな」を再び言はなかつたのです。

私は父に對し悔恨の念や、樹靜かならんと欲して、風を怨み、この名人を父に持ちながら父から獲た所は「悔恨」の二字である事を恥しく存じてゐます。

私はこの七回忌に際し、この懺悔の一念を父の靈に捧げるの意は、今後の精進の途に上らんとするに外ありません。

終りに枕みて、父を偲ぶ草をお恵み下さいました方々に、深甚なる御禮を申し上げておきます。